読書科学

第12巻 第 4 号（通巻 第46号）　昭和44年 6 月 1 日 発 行（季刊）

年報　1968年の読書界
はしがき　阪本 一郎
読書科学の研究　岡田 明
増田 信一
佐藤 泰正
出版界の展望　河北 憲夫
貸本業界の展望　鍵山 正人
清水弘子他
年間時潮　北島 武彦
高木 和子

46

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

1968年の読書科学　阪本一郎　1

読書科学の研究

教育学的研究（Ⅰ）読解指導　岡田　明　5

（Ⅱ）読書指導　増田信一　9

心理学的研究　佐藤泰正　16

出版界の展望　河北憲夫　22

貸本業界の展望

貸本屋と利用者　鍵山正人　27

貸本屋の実態調査　清水弘子　冨沢木実　横尾とみ子　宮井博子　31

年間時潮

国内情報　北島武彦　34

海外情報　高木和子　39

会　報　45

総目次　46

日本読書学会役員

会　長（理事長）阪本一郎

常任理事（*印は庶務担当）

大内茂男　*岡田明　岡本奎六　加賀秀夫　倉沢栄吉
*阪本敬彦　佐藤泰正　滑川道夫　波多野完治　平沢薫
福沢周亮　村石昭三　山本晴雄　*室伏武

監　事　深川恒喜　望月久貴

理　事

井口忠司　井沢純　石森延男　出雲路猛　裏田武夫
大西誠一郎　岡田温　尾原淳夫　加賀栄治　楮本良平
金沢孝　叶沢清介　蒲池正夫　久保田彦穂　小針孝哉
西藤寿太郎　佐藤宏之助　佐藤貢　清水慶子　清水正男
竹内実次　西村友円　芳賀純　花田哲幸　浜中重信
古野有隣　藤田圭雄　本間康平　松村康平　松本武
嶺光雄　三輪計雄　三輪和敏　森田宗一　弥吉菅一
弥吉光長　渡辺茂男　渡辺正亥　渡辺正己

編集委員

阪本一郎　滑川道夫　波多野完治　平沢薫　深川恒喜
山本晴雄

1968年の読書科学*

日本読書学会　阪本一郎**

日本読書学会もこの年で創立13年を迎えた。ささやかな学会ではあるが，ここまで前進をつづけてくることができたのは，会員のみなさんのご協力のおかげにほかならない。

今年もこの年報を編集するに当たり，この学会の活動を中心に，随想めいた所見をまじえてはしがきとする。

読書教育

前年10月の教育課程審議会の答申を受けて，この年の7月，文部省から「小学校学習指導要領」が正式に告示された。（中学校のは明年になる予定だが，その答申は6月に発表された。）これによって，わが国の戦後第4回目の読書教育の脱皮が方向付けられたわけである。第1回目（昭22）は，軍国主義からの脱皮，第2回目（昭26）はアメリカ渡来の経験主義からの止揚，第3回目（昭33）はなお残存していた生活主義から系統学習への転換が行なわれた。これを受けた今回の改訂は，基本的な転換というよりは，目標の明確化と指導内容の精選による教育効果の高揚にある。

この度の改訂の前に本学会から読書指導の強化についての要望書と参考資料とを文部省に提出したことは既報したが，その大綱は実現されたと見てよい。ただし「B読むこと」の指導内容を三つの指導事項に分け，㈠に読解に関するもの，㈡にことばに関するもの㈢に読書に関するものを挙げている。すなわち「読書」に関する事項を強調する線が打ち出されたが，同時に「読解」と「読書」とのあいだの溝を深くする印象を与えるおそれをはらむことになった。

同じ7月に発行された全国大学国語教育学会編『講座・国語教育の改造』（全3巻，明治図書）は，わが国の国語科教育の進むべき路線を精密に設計したものとして注目される。その中で倉沢栄吉が「国語科教育の構造」を講じている。氏の〝4層構造〟の提案は，まだ略案にとどまっているが，このような全体構造をいっそう精密に設計することによって，指導要領に細分された指導事項を体系化する必要があるように思われる。

学会活動

本学会の第12回研究大会は8月9～10日，大阪市厚生年金会館で開いた。研究発表は理論部門（11件）と実践部門（10件）とに分けて行なわれ，別に公開講座「読解指導と読書指導」（4件）が持たれた。前に公開研究会を当地で開いたときもたいへん熱心な研究家・実践家が多数に集まったが，今回もそうで，冷房の中ながらたいへん熱っぽい集会となった。地理の関係で近畿地方の方々が多く，その方々の真剣な研究ぶりには高く評価されるべきものが多かった。

わが国で現在活動している研究団体で読書を対象に持っているものはかなり多い。思いつくままに挙げてみても，①日本国語教育学会，②全国大学国語教育学会，③全日本国語教育協議会，④全国国語教育研究協議会，⑤実践国語学会，⑥日本文学教育連盟，⑦文学教育研究者集団，⑧教育科学研究会，⑨児童言語研究会（順不同）などが数えられる。それに地方で自主的に結成されている研究集団を加えると，たいへんな数になるであろう。これらはそれぞれに主体的な存在意義を持ち，さかんに活動しているのはまことに壮観であり，わが国の読書教育の発展のために望ましいことである。

だが，これらの諸団体のあいだの提携がまだ充分に行なわれているとは言いがたい。研究情報の交換，共通主

---

* Japanese Society for the Science of Reading in 1968.

** SAKAMOTO, Ichirō (J. S. S. R., President)

題の共同研究・分担研究，そして研究者相互の親睦が深められるような機構が造られるべきではあるまいか。今年の大会で，私はつくづくそんな印象を深めた。

国語教育雑誌

5月に国土社から月刊『国語の教育』が創刊された。その編集の基本方針として，①自由で総合的な視野に立つ，②常に最高水準の研究と実践のために誌面をさき，そのような研究と実践とを育てる，③読者の要望に応える，と誌されている。

わが国では，類誌としてすでに穂波出版社発行の『実践国語』，明治図書発行の『教育科学・国語教育』等がある。ほかに読書研究と開連するものに，全国学校図書館協議会発行の『学校図書館』，筑摩書房発行の『言語生活』等がある。いままた新刊誌を迎えたことは，全国の国語教育研究の盛り上りを反映し，それをさらに促進するものとして喜ばしいことである。

それにつけても，われわれの『読書科学』の存在価値を意識せずにはおれない。アメリカを例にとれば，国際読書学会（ＩＲＡ）は〝Reading Teacher〟と〝Journal of Reading〟の2誌を発行しているが，前者は主として小学校の読書教師を対象とする実践研究を盛り，後者は中学校以上成人に渡る読書教育の学術的な研究を盛っている。さらに〝Reading Research Quarterly〟に長編の研究論文を編集している。これとは別に全国読書会議（ＮＲＣ）というのがあって，ここでも研究論文の年報を発行している。かの国の読書教育の事情はわが国とは違うにしても，それを推進するのには，学術専門的な研究と，現場実践的な研究との二つの層に分けて開拓している。それと比べると，わが国では実践研究誌が栄えているけれども，学術専門誌は本誌があるだけである。こうした現象の評論はここでは省くが，本誌の分担すべき貢献の任の軽くないことを痛感する。会員の方々にもこのことを自覚していただいて，本誌の体質をもっと改善していかねばならないと思う。

国際的交流

本年4月ボストンで開かれたＩＲＡの年次大会には，本会代表を送ることができなかった。8月コペンハーゲンで開かれた第2回世界読書会議には，既報のように室伏武氏を代表として送り，「教材の生産」の部会の座長として活動していただいた。ほかに滑川道夫氏・倉沢栄吉氏・井上尚美氏に出席していただいた。

ＩＲＡとしては1970年の第3回世界会議を日本に持ってくる意向があって，昨年から数名のスタッフが瀬踏みに来日していたのだが，日本の物価高に驚いて躊躇し，結局来年はシドニーで開催と決めたようである。近い将来に何とかして日本に招致し，わが国の読書教育の実情を世界に見てもらいたいと思うが，本学会の経済的貧困ではむりかもしれない。

「読書科学」は毎号外国のめぼしい研究団体や研究者に送っている。掲載論文のなかで，外国でも興味を持ちそうなものには英文のアブストラクトを付けている。これらのうち，ＩＲＡの“Reading Research Quarterly”最近号（IV,2）には，次の数編の summary が紹介された。

福沢周亮：漢字における読字の困難点に関する発達的研究（41巻）

河井芳文：読みにおける語彙の発達（39・40号）

岡田明：読みの柔軟性に関する研究（同上）

阪本一郎他：読書感想文に見られる子どもの感動点の発達（37号）

阪本一郎他：漫画「サザエさん」の作品分析（39・40号）

阪本敬彦・高木和子：回帰成就値による読書不振児の研究（39・40号）

代田昇・増村王子：子どもの読書における地域の特質について（37号）

谷川澄雄：児童雑誌の動向と問題点（38号）

全部で376編のなかへ8編が進出しただけであるが，パイプは本誌1本なのだからやむをえない。

誤解のないように付記しておくが，われわれの研究は海外に認められることをもって評価されるのではない。われわれの研究の直接の目標はむろん国内の読書問題の解決とそれによるわが国籍の読書科学の樹立にある。そ

の意味でわれわれの学会の場に発表されている会員の論文や記録はみな高く評価されるべきものである。それらの中から Quarterly の編集者が彼らにも興味のあるものを選んだというだけのことである。それにしても，このようにして研究情報の国際的交流に本誌が役立ちはじめたことを喜びたい。

読書科学賞

本会の読書科学賞規程による第2回の受賞者は，本賞の該当者がなく，新人賞は次のように決定し，表彰状がおくられた。

読書科学研究奨励賞　高木和子氏

昭和42年度に『読書科学』に発表された「回帰成就値による読書不振児の研究」への参加，及び海外情報の収集提供に対して。

研究活動

学会としての共同研究は，本年度内に成果を見ることができなかった。一つは心理学部門が中心になって討議・編集している『現代の読書心理学』であるが，大学紛争の余波を食って進渉が思うにまかせなかった。もう一つは学習研究社からの共同委託研究「読書能力の要因分析」で，目下統計作業にはいっている。また読書指導研究委員会は，新指導要領の発表待ちの態勢のまま休業している。

貸本業界

本号に貸本業界の情報を特集したのは，この庶民の特殊な読書奉仕活動の実態を記録しておくためである。この編集には大竹正春氏の一方ならぬご協力をたまわったことを感謝する。なお同氏のご教示には次のような事項があったので，ここに転記し，研究者の便に資する。次号には松村久氏の貸本店の経営の実践記録を載せる予定。

- 図書館雑誌　50巻5，6号貸本屋特集
- 福岡市の貸本店山部氏：マンガと貸本店の問題
- 広庭基介氏（京都大学文学部図書室勤務）：江戸時代貸本屋略史，図書館界　18巻4，5号（明治以降の資料も持っておられる）
- 湊美枝氏（成城大学文芸学部学生）：貸本店の読者に対しての面接調査記録

SUMMARY

The Japanese Society for the Science of Reading has now attained its 13th year. It is a joy for us that the Society is growing prosperously year by year.

Reading Education

The Course of Study for primary schools was published in July. This was the fourth revision since the War. Before this publication, the Society sent to the Ministry of Education a request note which advocated the necessity of reading guidance combined with teaching reading. The intent of the request seems to have been adopted. But the place of reading guidance in the subject of language has to be pursued more precisely.

Activities of the Society

The 12th annual meeting of the Society was held in August in Osaka for two days. Eleven reports of academic study, ten reports of practical guidance, and four lectures on reading were given.

In Tokyo, the Society had open sessions every month.

Here, it may be remarked that there are very many bodies which are studying reading in Japan. Each one has its own speciality and raison d'être. Their activities are contributing to the development of reading education in our country. But there is not yet enough cooperation. I think they should be better organized in the near future.

Magazines on language education

In May, a monthly magazine called **Language Education** had its beginning. We have already had about five magazines that deal with reading education. It is a great pleasure to us that those many magazines reflect the rise of the language education

and serve to promote it.

Generally speaking, they are in the field of practical language. The theoretical field of academic study in reading is left to our **Science of Reading**. So we feel a great responsibility to make it prosperous.

International Activities

We could not send a representative to the Boston meeting of IRA. In the 2nd World Congress at Copenhagen, Mr. T. Murofushi participated as chairman ; besides, Mr. M. Namekawa, E. Kurasawa, and S. Inoue attended.

We were privately hoping that the 3rd Congress would be held in our country. To do so, however, our Society should be stronger economically.

We should mention that in passing **Reading Research Quarterly** (IV, 2), eight theses were transcribed from **The Science of Reading**.

The Reading Science Prize

Our Society usually awards the Reading Science Prize to a person who has made a remarkable contribution in promoting reading science. But to my regret, we could not find anyone who deserved it.

The research report prize was given to Kazuko Takagi who had participated in the "Study of disabled readers" published in **The Science of Reading** this year.

読書科学の研究

教育学的研究（I）読解指導*

立正女子大学　岡田　明**

本稿の文献リストは，国立国語研究所で収集されたものに加えて，読書科学，国語の教育，言語生活所載の論文等を補充して作成した。貴重な文献の一部を研究する便宜を与えられた国立国語研究所の村石昭三氏，野間教育研究所の資料をおかりする上でお世話になった阪本敬彦氏ならびに高木和子氏に厚く謝意を表する。

概　観

昭和43年度の研究の動向を二つの面から分析する。一つは，商業雑誌の特集のトピックを追いかけるという形で分析する。他は，ここに，リスト・アップされた文献を，それぞれに重みづけをしないで，一定の規準により分類し，一つの動向を探知しようとするものである。

まず，教育科学国語教育の「特集」を眺めていこう。

1月号は，教育課程改定と現場研究の課題の特集である。望月久貴は巻頭論文において教育課程改定と現場研究の課題にふれている。氏は，聞くこと話すことの領域，読むことの領域，作文の領域，毛筆書写の領域，漢字学習の領域にわたって，その問題点を整理しているが，読むことの領域については，広いとらえ方での教材研究論の必要性と読書指導の計画性と組織性を重視している。そのほか，国語教育の目標や発達段階と内容の精選などが，新しいカリキュラムと関連して論究されている。

2月号は，読み書き能力を高める重点指導の特集である。平井は小学校における指導内容の精選を問題にし，その中で，特に，読みの能力の分析を重視し，次のようにまとめている。文字力，語いの能力，読解の能力，解釈の能力，鑑賞の能力，音読の能力，読書技術。そのほか2月号では，重点指導の計画と展開などが話題になっている。

3月号は「読解での抵抗は，漢字や語句だけか」が特集されている。中沢は読解指導における漢字・語句指導の位置について述べている。氏は，読めない漢字を読めるように，意味のわからない語句を理解させるように指導してから文章の内容を読解し，その学習が終わってから，漢字や語句の練習をする型など，4つのタイプの分類をおこなっている。

4月号は第一時間目の導入指導が特集されている。

5月号では読解における正確さの追求がなされている。沖山 (52) は，その中で，学習過程の全体構造を，第一構造（洞察思考過程）第二構造（ふりわけ・重みづけ思考過程）第三構造（ねりまとめ思考過程）として構造化し，これを具体的操作として，生徒の正しく読みとる能力の定着をはかり，その能力をひとり歩きの能力として高めることを提唱している。

6月号では，説明的文章の読み方指導が問題になっている。大西忠治，筒井直重，児山正明 (50) らが実践報告をおこなっているが，望月久貴は，理論的研究によるうらづけをすすめている。

7月号は文章論的教材研究の方法の特集である。永野は読解教材の文章論的分析の必要性を「いろいろなあいさつ」という小文を例示して論証している。それが指導面で重要な役割を果すからだとしている。

8月号は新指導要領の言語観・教育観が問題となり，

---

* Educational study on (I) reading

** OKADA, Akira(Rissho Women's University)

座談会で，民族の役割の強調，言語生活と言語文化の関連，伝達の役割の自覚，言語で思考し創造する技能，能力ならびに能力主義かどうかなどが問題となった。

9月号では，新指導要項移行期の基本計画研究が問題となり，小中の一貫性や指導計画作成のための問題点が論ぜられた。

10月号は，読解に全然関係がない。11月号は説明的文章における指導事項の特集となっている。12月号は漢字の指導計画と指導法の改造を問題にしている。

5月に創刊号の出た「国語の教育」は，7月に文学教材をどう扱うかを特集した。

つぎに本稿に所収した79の文献を分類し，量的に，本年度の研究の動向をたしかめたいと思う。

教材のジャンル別指導が最も多く24編あり，以下，読解指導一般，読解技能，指導過程，新指導要領，評価，読解指導と読書指導の関連，創造性，読解と表現の関連，基礎理論，言語能力との関連，特殊児童の読解がつづいている。これらを昨年度と比べてみると，新指導要領についての論文，読解指導と読書指導の関連についての論文，基礎理論についての考察が増えたり，新しく出てきていることに気づく。

つぎに，文献の分類表を眺めていただきたい。

教材のジャンル別指導……24編

安藤操（2），林進治他（7），広田早純（9），飯住英直（14），川野理夫（19），川野理夫（19），菰渕和士（22），加部佐助（23），村上美恵子（26），三浦東吾他（27），中沢政雄（32），中沢政雄（33），滑川道夫（35），新潟県立教育センター（36），中津留喜美男（37），大西忠治他（50），阪本一郎（53），阪本一郎（55），阪本一郎他（57），渋谷孝（64），渋谷孝（65），鮫島満（69），柴田武次（70），竹岡正夫（74），横山貞作（79）。

読解指導一般……19編

土部弘他（4），橋本哲男（10），花田哲幸（11），伊東信夫（13），黒沢修（17），望月久貴他（25），宮下忠道（28），宮川利三郎（30），中沢政雄（31），中沢政雄（34），野中幸夫（40），西原栄穂（41），中西一弘（42），沖山光（52），佐藤永戈（60），佐藤忠男（62），西郷竹彦（66），滋賀県国語教育研究同人会（67），若宮貞次（77）。

読解技能……7編

林進治（6），岩手国語部会（12），小林喜三男（24），岡田明（47），佐藤泰正（59），土屋康雄（76），八木徹夫（78）。

指導過程……6編

黒沢修（18），大西久一（49），須藤久幸（61），相馬信男他（63），高田亘（73），竹島清治（75）。

新指導要領をめぐって……5編

倉沢栄吉他（15），倉沢栄吉他（16），輿水実（20），鈴木康之（68），高橋和夫（72）。

評価……4編

野中幸夫（39），岡用明（43），岡田明（45），大竹大三（48）

読解指導と読書指導……3編

増田信一（29），阪本一郎（54），阪本一郎（56）。

創造性……3編

青木幹男（3），原栄一（8），西原栄穂（38）。

読解と表現の関連……2編

城戸幡太郎（21），岡田明（46）。

基礎理論……2編

小川末吉（51），高橋和夫（71）。

言語能力との関連……2編

天野清（1），福沢周亮（5）。

特殊児童の読解……2編

岡田明（44），佐藤泰正（58）。

次に，これらのトピックスのいくつかについて，少し詳しい紹介をしていくことにする。

新指導要領をめぐって

これについては，同名の座談会（16）が持たれている。そこでは，昭和二十年代の経験主義からの離脱，指導内容の精選，文学教育の重視，学習漢字の増加，毛筆必修，作文教育と読書指導の重視などが話題になった。

そのほか，教育科学国語教育が1月号でその特集をお

こなっていることは，前述のとおりである。

読解指導と読書指導

阪本一郎(56)は，滑川の読解は読む機能であり，読書は読む行為でる。読解指導と読書指導は同存対比構造をもつ。したがって「読むことの教育」という同床に立って，協和し，読解指導から読書指導への発展，読書指導から読解指導への回帰，その往復によって，読むことの教育の達成を期さなければならない，という論に賛同しつつ，それらを心理学的に分析している。氏は，読書が適応行動であるという立場から，それは，人が読書材に働きかけ，同時に読書材が人間に働きかけてその相互規定の結果，力学的均衡に達する過程だとし，そのプロセスに三つの位相を設け，それぞれに対応する指導領域を提案している。すなわち，言語的適応の位相——言語指導（従来の読み方），経験的適応の位相——読解指導，人格的適応の位相——読書指導。

同様な論究は，文献(54)にも見える。増田信一(29)は，国語科における読書指導と他領域における読書指導との区別，相互の位置づけ，指導内容と指導過程を論じた。

読解と表現の関連

岡田明(46)は，鑑賞を表現の面に位置づけながらも，求心性思考の働く読解過程とその終了時に鑑賞活動の多くが放出されること，読解と表現が三角形の頂点をつき合わせた形になっていることを考察している。

城戸幡太郎(21)によれば，コミュニケーションを重視する言葉の教育としては象徴の意味を表現したり，解釈したりする方法を学ばなければならないが，一般意味論は，それを問題にする。一般意味論は，社会科学の基礎学である。今後の国語の教育は，人文科学または社会科学の基礎学として教科の教育でなければならない。

創造性

原栄一(8)は創造性を伸ばす読むことの学習指導を実践をふまえて論じている。氏によれば，文章を読むということは読み手の個性的経験をもとにして，めいめいの心の中に意味を作り出すことである。その精神的に作り出す想像力によって，具体的な一つの形がとられた時に，創造ということができる。

そのほか，西原栄穂(38)は，創造的思考力を育てる読解指導について論じた。

本年度の新しいトピックスを中心に考察をすすめたが，残りの論文の紹介は紙幅の関係ではぶくことをお許しいただきたい。

文献リスト

1. 天野清：言語能力の形成・発達と能力観・発達観　言語生活　昭43　8月号　17—27
2. 安藤操：芸術・国語の教育としての文学教育　国語の教育　昭43　7月号　34—41
3. 青木幹勇：考えながら読む　教育研究　昭43　10月号
4. 土崎弘　他：文章論を読解指導にどう生かすか　教育科学国語教育　昭43　7月号
5. 福沢周亮：漢字における読字の困難点に関する発達的研究　読書科学　昭43　11巻3号　16—21
6. 林進治：思考をひらく読み——読総合法　文学　昭43　4月号　60—72
7. 林進治他：説明的文章の指導過程と指導法の研究　教育科学国語教育　昭43　6月号
8. 原栄一：創造性を伸ばす読むことの学習指導　国語の教育　昭43　8月号　52—59
9. 広田早純：説明文の読解指導　国語の教育　昭43　60—67
10. 橋本哲男：国語科を中心とした読書指導体系　読書科学　昭43　11巻1・2号　66—77
11. 花田哲幸：文章観と読解指導(5)(6)　教育研究　昭43　23巻4・10号
12. 岩手国語部会：一次読みと二次読みをめぐって　教育国語　昭43　3月　112—124
13. 伊東信夫：読みとイメージつくり　国語の教育　昭43　7月　65—72
14. 飯住英直：説明文の読解　実践国語　昭43　8月　62—67
15. 倉沢栄吉他：国語教育の動向をさぐる　国語の教育　昭43　5月号　8—24

16. 倉沢栄吉他：新指導要領をめぐって　言語生活　昭43 8月号　2—16

17. 黒沢修：国語授業のあり方　—読解指導を中心として—　山形教育　昭43　1月　12—20

18. 黒沢修：主体的読解力形成のためのてだてはどうでなければならないか　—指導過程を問題にしながら—　国語研究（山形大学）19　昭43　3月　10—18

19. 川野理夫：文学作品で何をどう教えるか　国語の教育　昭43　5月　62—69

20. 輿水実：国語科読解研究の動向　教育科学国語教育　昭43　3月　119—124

21. 城戸幡太郎：意味の表現と解釈　国語の教育　昭43 9月　5—7

22. 菰淵和士：文章理解の過程とあらわれる問題(4)〜(7)　—歴史物語の場合—　実践国語　昭43　4—12月　341—344

23. 加部佐助：中学生現代詩の鑑賞と創作(二)　実践国語　昭43　8月　15—20

24. 小林喜三男：これから—読綜合法を始める人々のために—新しい国語教育の創造—　児言研国語　昭43　8月　42—54

25. 望月久貴他：実践報告に対する意見　教育科学国語教育　昭43　6月

26. 村上美恵子：段階を追った説明文読解の指導　実践国語　昭43　8月　68—71

27. 三浦東吾他：説明的文章の指導過程研究の問題点　教育科学国語教育　昭43　6月

28. 宮下忠道：ことばの注解と解釈の方法　国語の教室　昭43　7月　2—5

29. 増田信一：読書指導と読解指導　国語の教育　昭43　11月号　51—58

30. 宮川利三郎：正確に読み取るための基本的事項の構造　教育科学国語教育　昭43　5月　33—47

31. 中沢政雄：読解学習構造上の諸問題(5)〜(8)　国語教育科学　昭43　1〜4月

32. 中沢政雄：文学教材学習指導上の諸問題　国語教育科学　昭43　10〜11月

33. 中沢政雄：文学的文章の学習指導上の問題(1)〜(3)　国語教育科学　昭43　6〜8月

34. 中沢政雄：直観読み・分析読みの基礎理論　国語教育科学　昭43　5月　23—30

35. 滑川道夫：桃太郎像の変容(3)　読書科学　昭43　12巻 1号　7—17

36. 新潟県立教育センター研究集録：説明的文章の意味構造のはあくの実態とその指導　昭43　3月　1—43

37. 中津留喜美男：文学教材の読解指導(1)(2)　国語教育科学　昭43　10〜11月

38. 西原栄穂：創造的思考力を育てる読解指導(1)(2)　実践国語　昭43　8・12月

39. 野中幸夫：順序をたどって意味をとる読解技能力の調査とその指導—一年生を中心として—　実践国語　昭43　6月　339—342

40. 野中幸夫：主体的な読みの学習計画　実践国語　昭43 12月　19—27

41. 西原栄穂：読みの指導の開拓　実践国語　昭43　6月 8—14

42. 中西一弘：「最後の授業」の解釈設問について　—フランスにおける解釈指導の考察—　学大国文　昭43　2月 76—92

43. 岡田明：ＩＴＰＡの理論と下位検査　教育心理　昭43 16巻11号　68—71

44. 岡田明：弱視児の読みの機制　立正女子大短大部研究紀要　昭43　12集　56—63

45. 岡田明：音読の評価について　立正女子大保育論業 昭43　2号　73—75

46. 岡田明：読解と表現　教科の論理と心理　昭43　明治図書

47. 岡田明：読みの柔軟性に関する研究　読書科学　昭43 11巻1・2号　16—21

48. 大竹大三：言語活動としての読解とその評価　教育心理 昭43　3月　202—205

49. 大西久一：あるべき読解指導過程への模索　学校教育 昭43　1月　24—29

50. 大西忠治他：説明的文章の読み方指導　教育科学国語教育　昭43　6月　5—21

51. 小川末吉：解釈学　国語教育科学　昭43　8月　5—8

52. 沖山光：読解指導における「正確さ」の追求　教育科学国語教育　昭43　5月　5—18
53. 阪本一郎：昌険ダン吉の作品の分析　読書科学　昭43　12巻1号　18—24
54. 阪本一郎：読むことの指導と読書指導とのあり方を中心に　教育科学国語教育　昭43　11月　98—99
55. 阪本一郎：児童漫画「のらくろ」の作品分析　読書科学　昭43　11巻3号　1—11
56. 阪本一郎：まま子の読書指導　国語の教育　昭43　11月　127—131
57. 阪本一郎他：四コマ漫画「サザエさん」の作品分析　読書科学　昭43　11巻1・2号　30—47
58. 佐藤泰正：盲児の点字触読に関する発達的研究(3)　盲学校中途編入者の点字触読能力　読書科学　昭43　12巻1号　25—35
59. 佐藤泰正：大学生におこなった速読訓練の効果(1)　読書科学　昭43　11巻3号　12—14
60. 佐藤永戈：読解方法論—対象主義・心理主義—　語学文学　昭43　3月　44—51
61. 須藤久幸：読解の基本的指導過程実践上の諸問題　教育科学国語教育　昭43　10月　94—99
62. 佐藤忠男：「読み」という言葉から　国語の教育　昭43　12月　120—127
63. 相馬信男他：国語科の学習指導過程に関する研究　教育研究紀要　昭43　3月　1—60.
64. 渋谷孝：説明的文章の教材分析および指導過程についての一考察　新潟大学教育学部紀要　昭43　3月　18—29
65. 渋谷孝：説明的文章における指導事項の精選　教育科学国語教育　昭43　11月　5～21
66. 西郷竹彦：<悪>をもって悪をあばくもの　国語の教育　昭43　7月　26—33
67. 滋賀県国語教育研究同人会：読みの本質に迫る教材化の視点　国語の教育　昭43　6月　109—114
68. 鈴木康之：新しい指導要領と言語教育　言語生活　昭43　8月号　34—39
69. 鮫島満：近・現代短歌鑑賞論—短詩型文学教育の方法論を探りつつ—　実践国語　昭43　12月　11—18
70. 柴田武次：文学作品の描写内容の読み　教育科学国語教育　昭43　3月　71—97
71. 高橋和夫：新解釈学(4)～(8)　実践国語　昭43　12月　339—344
72. 高橋和夫：戦後国語科はどう変わったか　言語生活　昭43　8月　28—33
73. 高田亘：読むことの学習指導—指導過程への考え方—　大下学園研究紀要　昭43　12月　28—43
74. 竹岡正夫：読解指導とは何を指導するのか—説明的文章の読み方指導をめぐって—　教育科学国語教育　昭43　9月　81—101
75. 竹島清治：小説の登場人物をとらえる指導過程論　教育科学国語教育　昭43　7月　76—85
76. 士屋康雄：一読・三読・透読(1)(2)　実践国語　8・12月
77. 若宮貞次：文法を手がかりにした読解指導　—説明的文章—　実践国語　昭43　8月　56—61
78. 八木徹夫：文章を正確に読み取る技能を高めるために　教育科学国語教育　昭43　5月　19—32
79. 横山貞作：説明文読解の問題点—文部省の学力調査の分析—　実践国語　昭43　8月　72—76

教育学的研究 (II) 読書指導*

東京学芸大学附属大泉中学校　　増田信一**

本項にあげた文献リストは，手元にある資料をもとにして作成した。その中には，各地の研究仲間から寄せられた貴重な資料もあり，深川恒喜先生に拝借した資料や国立国語研究所の図書館資料も含めてある。現場の研究物の中には，もれてしまったものもあると思う。また，私の判断で割愛したり，読書指導のわくの外にあるものとして除外したものものもあることをお断わりしておく。

概　観

本年度の読書指導面での最大の関心事は，文部省から「学習指導要領」が出されたことであろう。小学校については，5月に＜案＞(60)が提示され，7月に＜告示＞された。中学校については，12月に＜案＞(61)が提示された。そして，基本的には，従来の学習指導要領と同じであるが，国語科での読書指導が強調され，他の教科や領域での読書指導がきわめて弱いものとなってしまった点が，特に目につく。

また，読書指導に関する研究物は，月刊誌の面でみると，昨年と比較して低調であった。「学校図書館」だけはあいかわらず年間を通じて読書指導をとりあげているが，他の月刊誌「教育科学国語教育」・「教育心理」・「児童心理」・「学校教育」など，昨年特集として読書指導をとりあげたのに，本年はいずれも特集としてはとりあげていない。ただ，本年になって創刊された国土社の「国語の教育」は9月号と11月号で，読書指導を意欲的に扱っているのが目につく程度である。シリーズ物の出版としては，明治図書の「小学校・読書指導講座」(12)が出た程度である。

一方，現場での研究熱は急速に高まりつつある。東京都では，小・中・高が一体となってつくっていた東京都学校図書館協議会がその下部組織として校種別の研究会を発足させたし，大阪では，吉井善三郎氏を中心とした「本とこどもの会」が，その研究論文集の第一集を出した。また，日本読書学会の公開研究会も毎回かなりの人数が出席している。

したがって，出版界の動向からすると，低調な一年であり，現場の研究面からすると，充実した一年であったといえよう。

1.　学習指導要領における読書指導

小学校と中学校の学習指導要領が改定されたわけであるが，両者の読書指導要領に対するとりあつかいは，かなり開きがあり，義務教育の一貫性という面では，大きな疑問点を残した。（中学校の＜告示＞は昭和44年の4月に出されたが，＜案＞とほとんど同じであった。）

まず，小学校の国語科指導要領においては，各学年とも「内容」の「B　読むこと」の第三項に読書指導に関する指導事項を特出している。（第一項が読解指導・第二項がことばに関する事項）ところが，中学校においては，従来のままで，読解指導と読書指導を雑居させている。

また，指導事項については，小学校では，「内容B 読むこと(3)」で六年間に30の指導事項を出しているのに対して，中学校では，「内容B　読むこと(1)」で各学年二つずつ，三年間に6の指導事項を出しているに過ぎない。そして，「内容の取り扱い(3)」に各学年三つずつの指導事項を出し，それらについて「次の事項の指導も配慮する必要がある」と示されている。これはきわめて不統一であり，現場を混乱におとしいれる材料となっている。

これらの点については，今後いろいろの論議がかもし出されることだろう。なお，学習指導要領の解説については，文部省の担当官である藤原宏(10)，(11)，(13)があり，その問題点については望月久貴(56)，輿水実(46)などがある。雑誌の座談会では，「国語の教育」(23)(30)「言語生活」(26)などで扱っている。また，藤原担当官の解説に対しては「学校図書館」で国分一太郎など五人の批判(42)がのっている。しかし，学習指導要領改定に対する発言が予想外に少なく，(27)(29)(116)この点にも問題がひそんでいると思われる。

2.　読書指導と読解指導

国語科の読書指導が強調されると，必然的に読書指導と読解指導の関係が話題になる。この問題については，かなり以前から論議があった。その結果として，両者を一元的にとり扱おうとする実践例(34)(36)や，読解から

---

*　Educational study on (II) reading guidance

**　MASUDA, Shinichi (Tokyo Gakugei University)

読書へという定型をやぶろうとする試み (16) (21) (24) (113) がいくつかなされた。

同時に，もっと原理的な立場から，「読むことの教育」に立って両者を内包しようとする考え方 (68) (96)，入門的の読む経験の積み重ねから「読む力」を考えようとする動き (17) (63) などが出てきた。阪本一郎の「読書から読解へ」という呼びかけ (88) もその一つである。また，文学教育の偏向を阻止するためと道徳教育に役だてるために，読書指導を強調したのだという日教組の反論 (70) も出されている。

都立教育研究所は，昨年度につづいて，読書指導に関する研究の報告 (110) をしているが，「読書指導の方法」の項で，読解指導と読書指導を有機的にからみ合わせるために指導の形を考え，六つの形を具体的に示している。

両者の関係について論ずるに際して注意しなくてはならないことが三点ある。

その一つは，「読書指導」「読解指導」ということばの定義づけをはっきりさせないと，その中味があやふやになってしまうことである。この点についての一般的な共通理解はまだなされていないので，混乱が起きやすいのであるが，いちおう柱とすべきものとしては，『読書と読解とは，ともに読むということのなかの一要素であって，読解という読み方や読書という読み方が別々のものとして存在するわけではないが，指導上の目標とか，取り上げる指導事項とかを分析的に考えてみると，以上のような特色が，読書と読解にはそれぞれあるといってよい。』藤原宏 (12) がある。(「国語教育と読書指導」60ページ参照)

もう一つは，従来の学習指導要領においても，両者は，それぞれはっきりした位置づけが行われていたのに，実態としては，読解指導中心に片寄ってしまった事実 (10) (27) を反省し，同じ失敗をくりかえさないようにすることである。

最後の一点は，「鑑賞指導」についての考え方である。従来，読解指導の延長として考えられていたが，読書指導の中でとり上げようとする動きが新しい学習指導要領で示されたことである。この点については，増田信一 (52) の意見が提出されている。

3. 補充教材について

この一・二年，補充読み物の企画発行がめだってふえている。全国学校図書館協議会の「集団読書テキスト」は昨年度につづいて6冊ふえた (120) し，新学社では，「新学社文庫」(101) を発刊して，中学生用の読書資料の充実をはかろうとした。その特色の中に，巻末に現場の教師による「読書のしかた」がついているのが注目される。また，学習研究社では，国語科の副読本としての性格を強くうち出した「中学生の読書」各学年2冊の企画をすすめている。(昭和44年4月に発行された)

国語教科書採録作品の原典や同一作家の作品を読ませる実践例 (34)，古文テキストのほかに単行本を読破させる古典読書 (83)，などがみられる。定金恒次は「読書教材選択の基準」(96) を五項目にしぼっている。

4. 国語科以外の領域

全国学校図書館協議会の機関誌「学校図書館」の毎月の企画のすばらしさが目ひく。2月号「『ロウソクの科学』をどう読ませるか」(75)，7月号「新教育課程・国語と読書指導」(13) (42)，9月号「このようにして子どもを本好きにした」(8) (58)，10月号「教科学習と資料」(74)，11・12月号「小説『坊っちゃん』の研究」(107)，速報版での実態調査「現代青少年の読書」(119) などである。

「概観」でも紹介した「本とこどもの会」の研究論文集は，研究の幅の広さと一つ一つの主題に対する現場的な掘りさげ方の深さに見るべきものがたくさんある。幼児と読書 (63) (1)，マスコミと読書 (109) (65)，名作と読書 (106) (62) (28)，課題図書 (64) (104) 読書会 (118) など学ぶことが多い。

松山市立御幸中学校の，学校図書館を中心とした全校的な指導体制を確立しようとしている研究も注目したい。

文献リスト

1. 合田修：幼稚園における絵本の利用　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　90—95
2. 青木弘：小説指導における一試案　大阪教育大学附属平野中学校研究紀要　昭43　3—8
3. 阿部敏子：読書指導の問題点とその対策　読書科学11巻—3号　'68—3　44—49
4. 文学教育研究者集団：文体づくりの国語教育（夏期集会で何が問題になったか）教育科学国語教育121　'68—11　105—107
5. 文芸理論研究会：視点をとおし典型をめざす文学の教授・学習過程(夏季集会で何が問題になったか)　教育科学国語教育121　'68—11　104
6. 道家達将：科学読みものと理科教育　学校図書館208　'68—2　26—30
7. 深川恒喜：読書教材　明治図書講座　国語教育の改造2　教材の精選と深究　昭43　147—159
8. 深見茂他：このようにして子どもを本好きにした　学校図書館215　'68—9　15—48　読書デーを設けて（深見茂）一万円読書のこころみ（鈴木義一）　国語科・拡充教材による指導（花園幸雄）　小学一年生の不読児指導（友松儀雄）　家庭への働きかけ（寺本俊美）　教師自身が読書好きに（千葉金二）　あるＳＦグループから（礒野岩男）図書館にひきつける（細井龍夫）　読書意欲をよびおこす（定宗義勝）　読書ノートの活用（橘高洋一）　学校独自に年三回読書週間を設定して（黒沢浩）
9. 藤田重次：国語科における読書指導の推進　教育月報225（徳島県）　'68—10　44—47
10. 藤原宏：小学校教育課程改定・国語「読むこと」の中の「読書指導を組織的・計画的に」ということについて　学校図書館速報版　485　1月25日号　1—4
11. 藤原宏：小学校学習指導要領案の解説＜国語＞　初等教育資料226　'68—6　5—8
12. 藤原宏・井沢純：小学校・読書指導講座　全五巻　明治図書　昭43　（Ⅰ巻国語科教育と読書指導・Ⅱ巻国語科における読書指導の計画と展開・Ⅲ巻社会科・理科等の学習と読書活動・Ⅳ巻名作による人間教育・Ⅴ巻伝記による人間教育）
13. 藤原宏：教育課程の改定にともなう小学校・国語と読書指導・学校図書館213　'68—7　9—18
14. 後藤慶子：読書能力と知能について　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　103—110
15. 橋本哲男：国語科を中心とした読書指導体系　読書科学11巻1・2号　'68—1　66—77
16. 花園幸雄：国語科における読書指導——読書と読解の関連　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　7—14
17. 浜中重信：小学生の読書指導　文理書院　昭43　402ペ
18. 半田茂雄：読書療法の事例研究　「経営的にはあくした生徒指導」より　読書科学11巻3号　'68—3　49—52
19. 東村山市教育研究会図書館研究部：「何をすすめるべきか」子どもの本推せんリスト総点検　学校図書館速報版488　2月25日号　3—4
20. 飛田文雄：小泉信三の読書論について　日本近代読書論史のための覚え書きその一　読書科学12巻1号　'68—12　1—6
21. 飛高敬：教師の「読み」と授業の質——トルストイ「一飛び」の実践を比較して　国語の教育3　'68—7　73—83
22. 広瀬節夫：戯曲の学習指導——木下順二「夕鶴」のばあい　国語科研究紀要1（広島大学附属中・高校）'68—12　32—51
23. 古田拡・水野寿美子・倉沢栄吉：国語教育の隘路は何か＜座談会＞　国語の教育3　'68—7　8—18
24. 堀芳夫：現代国語「戯曲」と「小説」から　国語科研究紀要1　昭43　52—62
25. 池田信夫：過去の大会の成果と残された問題点　＜3＞高校における読書指導——第16回全国ＳＬＡ研究大会のために　学校図書館速報版506　8月25日号　4—5
26. 石黒修：倉沢栄吉・飛田多喜雄・森岡健二　新指導要領をめぐって＜座談会＞　言語生活203　'68—8　2—16
27. 石田成太郎：新旧「読むこと」の質的変化を対比する——移行期の指導計画研究で留意したい問題点　教育科学国語教育119　'68—9　27—29
28. 磯野岩男：中学生と翻訳文学　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　15—18
29. 板橋清：新教育課程と読書指導　学校図書館218　'68—12　51—54

30. 出雲路猛・今村秀夫・加賀美秋子・滑川道夫：読書指導を国語科でどう考えるか<座談会> 国語の教育7 '68—11 8—21

31. 伊予田博：中学生の読書能力の診断と読書生活の問題点 読書科学11巻1・2号 '68—1 78—81

32. 加賀美秋子：読書人格をめざす読書指導の一事例 読書科学12巻1号 '68—12 42—45

33. 楮本良平：読書不振児の全校指導教室 読書科学11巻1・2号 '68—1 82—86

34. 加藤章三：本校国語科における読書指導の試み——国語科指導と読書指導の一元化 大阪教育大学附属池田中学校研究紀要 昭43 16—20

35. 金子百合子：国語教室における読書指導 読書科学11巻3号 '68—3 39—43

36. 加部佐助：表現と理解の接点における読書感想文の指導——中二「屋根の上のサワン」を通して 実践国語340 '68—2 133—137

37. 加茂章：読書指導の一系統——日本人の自我の覚醒 学校図書館207 '68—1 45—52

38. 教育課程審議会：中学校教育課程の改善について（文部大臣に対する答申） 言語生活203 '68—8 84—85

39. 教育出版国語編集部：中学校における読書指導・古典指導 教育出版株式会社 昭43 100ページ

40. 黒沢浩：学級活動のなかの読書指導 国語の教育5 '68—9 68—75

41. 黒沢浩：過去の大会の成果と残された問題点<7> 中学校における読書指導——第16回全国ＳＬＡ研究大会のために 学校図書館速報版510 10月5日号 4—5

42. 国分一太郎他：指導要領案・藤原氏の回答を読んで 学校図書館213 '68—7 39—49 （読ませる文章の内容にきびしい規制がかかるのは必定・国分一太郎 根本的なところで錯誤している面がある・水野寿美子 国民性の育成がいかに読書指導と結びついてくるか・石上正夫 新指導要領のねらいと現場の情勢にへだたり・武田光子 "主体的に読む" とはどういうことか・松本幸久）

43. 輿水実・小川末吉：国語科自由読書の指導 明治図書 昭43 214ページ

44. 輿水実：国語科基本的技能の指導 講座4読書技能 昭43 176ページ 講座3文学鑑賞技能 156ページ

45. 輿水実・中津留喜美男・小川末吉・風間章典：読書指導単元の問題（共同研究） 国語教育の近代化75 '68—10 27—56

46. 輿水実：読むことの指導の変化の方向（連載講座・国語教育はどう変わるか第八回） 教育科学国語教育121 '68—11 126—131

47. 牧野孝：中学生の読書生活 国語教育相談室月報112（光村） '68—11 5—10

48. 正村貞治：「科学読みもの」の読書指導——本の内容と感想の質とのかかわりあいについて 学校図書館208 '68—2 17—25

49. 増田信一：国語科における読書指導——昭和42年の文献を中心として 東京学芸大学附属大泉中学校研究集録 昭43 111—130

50. 増田信一：国語科における読書指導——読書の指導過程を中心として（第35回全国国語教育研究協議会での発表） 昭43 14ページ

51. 増田信一：学校図書館における読書指導 東京都中図研会報2 '68—10 2—3

52. 増田信一：読書指導と読解指導——強力な読書指導を推進するために 国語の教育7 '68—11 51—58

53. 増村王子・過去の大会の成果と残された問題点<4> 小学校における読書指導——第16回全国ＳＬＡ研究大会のために 学校図書館速報版507 9月5日号 4—5

54. 松山市立御幸中学校：読書生活の確立をめざす学校図書館研究のあゆみ 昭43 102ページ

55. 三原種晴：読書指導——動物の変装（四年生）の場合 学校教育 '68—11 73—75

56. 望月久貴：教育課程改定と現場研究の課題 教育科学国語教育111 '68—1 5—10

57. 本宮久：読書指導における問題をさぐる——小学校中学年の能力差の実態分析 本とこども研究論文集Ⅰ 昭43 111—119

58. 森久保仙太郎：読書が好きになるということ——見なかったものが見えてくる 学校図書館215 '68—9 9—14

59. 森下巌：読書指導の計画研究 教育科学国語教育119 '68—9 65—69

60. 文部省：小学校学習指導要領案（国語科） 学校図書館213 '68—7 21—36 文部省：小学校学習指導要領 大蔵省印刷局 '68—7

61. 文部省：中学校学習指導要領案 明治図書 '68—12

62. 中川弘和：グループで読む名作物語——クラブ活動の記録をもとに 本とこども研究論文集Ⅰ 昭43 71—75

63. 長沢寿子：就学前の幼児の字に対する興味について 本とこども研究論文集Ⅰ 昭43 1—6

64. 中島章一：「学習にも役立つ本」は何故読まれないか <一つの実践を通して> 本とこども研究論文集Ⅰ 昭43 82—89

65. 中島直美：マンガばかり読む子の指導——低学年において 本とこども研究論文集Ⅰ 昭43 44—46

66. 中西暘子：読書指導（こくちばん中等国語新訂版）——何を読ませるべきか・時間の設定 国語教育（三省堂）10巻1号 '68—11 31

67. 滑川道夫：読書指導の計画化・組織化 教育科学国語教育111 '68—1 77—80

68. 滑川道夫：読書指導 明治図書講座 国語教育の改造1・本質の課題の検討 昭43 144—157

69. 仁木ふみ子：高校生に読ませる⑩現代の叙情 学校図書館207 '68—1 56—59 高校生に読ませる ⑪対話の世界 同208 '68—2 56—59 高校生に読ませる ⑫感想文是々非々をめぐって 同209 '68—3 54—57

70. 日本教職員組合：私たちの教育課程研究 国語教育 一ツ橋書房 昭43 254ペ

71. 日本国語教育学会：昭和41年度国語教育の調査研究リスト——全国国語教育研究集録第7集 日本国語教育学会誌31 '68—6

72. 日本読書学会：読むことの指導と読書指導とのあり方を中心に（夏季集会で何が問題になったか） 教育科学国語教育121 '68—11 98—100

73. 日本文学教育連盟：読書指導過程の開発と創造をめざす集団研究課題の確認（夏季集会で何が問題になったか） 教育科学国語教育121 '68—11 100—102

74. 野口茂夫他：教科学習と資料 学校図書館216 '68—10 9—43 国語教育と資料——日本作文の会の立場から——野口茂夫 国語学習の主体的展開と資料——実践国語学会の立場から——西原慶一 歴史教育と資料——歴史教育者協議会の立場から——原忠彦 社会科教育と資料——小学校社会科研究協議会の立場から——小松崎徳郎 仮説実験授業と科学読み物の教育——仮説実験集団の立場から——庄司和晃 科学読み物と科学教育——科学教育研究協議会の立場から——黒田弘行

75. 野田彰他：「ロウソクの科学」をどう読ませるか 小学5年の場合・野田彰 中学1年の場合・二宮重恒 高校の場合・土屋昌三 学校図書館208 '68—2 33—46

76. 大神貞男：夜尿症児の読書療法による軽快例——症例第8報告 読書科学11巻1・2号 '68—1 48—51

77. 大神貞男：非行少年の読書療法による治療例（症例第七報告） 読書科学11巻1・2号 '68—1 88—90

78. 大神貞男：非行少年の読書療法による治療例（症例第九報告） 読書科学11巻3号 '68—3 22—28

79. 大島真：読む力を育てるために——課題図書の指導 国語教育相談室月報112 '68—11 2—4

80. 大西久一：国語科における読書指導の展開 学校教育（広島）'68—10 36—41

81. 大村はま：本で本を読む——中学校における読書指導の一例 国語の教育1 '68—5 70—77

82. 大村はま：やさしい文章教室 共文社 昭43 222ペ 読書の感想を書くことと，紹介を書くこと 120—123

83. 岡田明：読みの柔軟性に関する研究 読書科学11巻1・2号 '68—1 16—21

84. 岡本俊治郎：読みの自主的学習の記録——説明的文章を素材として 国語教育（三省堂）10巻6号 '68—7・8 5—11

85. 小谷等：「古典読書」へのあゆみ——徒然草（高一）指導のばあい 国語科研究紀要1（広島大附中・高）'68—12 63—76

86. 阪本一郎他：情緒不安定児に対する読書療法の事例研究 読書科学11巻1・2号 '68—1 52—65

87. 阪本一郎：話しことばを伸ばす読書指導 児童心理257 '68—4 85—90

88. 阪本一郎：まま子の読書指導 国語の教育7 '68—11 127—131

89. 阪本敬彦・高木和子：回帰成就値による読書不振児の研

究　読書科学11巻1・2号　'68—1　1—15

90.　定金恒次：作家論的視点に立つ読書指導　実践国語　'68—2　80—84

91.　定金恒次：校内読書会の実践——目的に応じた方法　学校図書館210　'68—4　43—46

92.　定金恒次：世界文学をこう読ませた　実践国語342　'68—5・6　19—23

93.　定金恒次：読書相談の実際　学校図書館212　'68—6　42—44

94.　定金恒次：過去の大会の成果と残された問題点<1>　国語科と学校図書館——第16回全国ＳＬＡ研究大会のために　学校図書館速報版504　8月5日号　4—5

95.　定金恒次：国語科における読書指導の特質をこう考える　学校図書館216　'68—10　44—47

96.　佐藤泰正：大学生に行なった速読訓練の効果（1）　読書科学11巻3号　'68—3　12—15

97.　清水悟郎：読書の指導法　明治図書講座　国語教育の改造3・指導の開発と徹底　'68—6　133—145

98.　首藤博唯：特設時間の読書指導——その計画と方法　教育科学国語教育115　'68—5　97—102

99.　小学校図書館利用指導研究会：学習と読書のガイドブック——学校図書館の利用のしかた　第一法規　昭43　80ページ

100.　代田昇・増村王子：父母と教師のための読書相談室——図書図書300冊解説付　鳩の森書房　昭43　254ページ

101.　新学社：新学社文庫　第一期12巻　第二期12巻　昭43

102.　管井光男：読書指導と進路指導——読書カードの分析から　学校図書館207　'68—1　37—40

103.　管井光男：読書指導と生活指導　学校図書館212　'68—6　47—50

104.　鈴木康子・岩坪昭子：課題図書を採点する——「子どもに親しまれる図書」という立場から　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　19—24

105.　高田亘：読むことの学習指導——指導過程への考え方　大下学園国語科教育研究会研究紀要13　'68—12　28—43

106.　辰己義幸：こどもは名作ものが好きなのだろうか——大阪市立中央図書館利用者（小学生）の読書傾向から　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　96—102

107.　中学生の読書研究会：小説「坊っちゃん」の研究　<1>「坊っちゃん」はどう読まれているか　学校図書館217　'68—11　41—51　<Ⅱ>小説「坊っちゃん」をどのように読んだか（上）——中学生の座談会から　同218　'68—12　42—48

108.　津山市立東小学校：読む子考える子を求めて——読書指導と資料の利用　114ページ　（学校図書館速報版490　3月15日　2—3）

109.　寺本俊美：マスコミの中の読書指導について——読書へのいざない　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　58—63

110.　東京都立教育研究所：小学校国語科における読書指導の研究——小・中学校における読書指導に関する研究Ⅱ　昭43　36ページ

111.　徳田渙：読むことの指導——「信号」と「車輪の下」　国語の教育5　'68—9　76—83

112.　友松儀雄：説明文の誤読と読書生活との関連——小学校1年生におけるテスト問題誤読者の読書生活百態　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　64—70

113.　山本厚：集団読書と自由読書の結びつき——集団読書によって子どもたちの読書生活は変わってきているか　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　47—57

114.　弥吉管一：作文指導・読書指導のいっそうの充実を——新指導要領（中間発表）を読んでの感想　教育科学国語教育118　'68—8　52—54

115.　横溝昭平：学級における矯正的読書指導の実践　読書科学11巻3号　'68—3　34—38

116.　吉井善三郎：壺井栄作「坂道」をどう読ませるか　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　38—43

117.　米山朝生：ノンフィクションの読書指導　国語の教育7　'68—11　67—72

118.　万屋秀雄：「宿題ひきうけ株式会社(古田足日作)論——母と子の読書討論会と関連づけて　本とこども研究論文集Ⅰ　昭43　25—37

119.　全国学校図書館協議会：実態調査・現代青少年の読書　学校図書館速報版512　10月25日号　1—4　同513　11月5日号　1—3　同515　11月25日号　1—5　同516　12月5日号　1—3　同517　12月15日号　1—5

120.　全国ＳＬＡ集団読書テキスト委員会：集団読書テキスト<小学校用><中学校用>全国学校図書館協議会　昭43

心理学的研究*

東京教育大学　佐藤泰正**

読書過程

村瀬旻(1)は文字の読み上げ過程に関する研究を行なっている。具体的には数字又はアルファベットの50個からなる文字系列を読みあげさせて，所要時間を測定する。刺激は白色紙テープでゴム印，横組で黒で印字したもの，文字の大きさは二種類で，大は9×6，間隔4，小は4×3，間隔3（単位mm）である。テープは刺激提示装置にはさみこまれ，その一定のスリット（窓）の部分のみがみえるようになっている。このスリットの幅は一時にみえる文字の個数で，1，2，3，4，5文字分と50文字分の6段階にした。そして，スリット内に現われる文字の最右端のものを，注視して読みあげることにする。被験者は成人8名。結果はスリットを広げることによって所要時間が減少する。これは被験者が現に読みあげている文字の外にスリット内の他の文字に対しても読みあげ以前に何らかの処理を行なう過程が含まれていると予想される。文字の大きさとの関係では大小とも時間はほとんど同一である。視野の広さに制約を受けるものとすれば，小文字の場合は，大文字より多数の文字が読みあげ以前の過程にはいり，大小文字間で差が生ずるはずだが，ここではそれがみられない。したがって，各文字が単位になって読みが行なわれていることがわかる。

読みの発達，訓練

笠原尚子，横池清，山川純一郎(2)は幼児の読解に関する研究を行なった。絵をみることが文章の読み及び読解にどんな効果をもつかをしらべた。結果は，絵をみることによって文章を読む技術があがったり，内容理解が促進されることはないという。また，文章の読みの技能の程度と内容理解の関係について，すらすら読む子とたどたどしく読む子でどちらが内容理解がよいとはいえない。「は」「う」「へ」「て」の読みかえの能力と読みの技術及び内容理解と関係もみられなかった。

福沢周亮(3)は漢字の読みを困難にしている要因は何かを発達的に検討した。要因として，字画（漢字の画数の多少）頻度（使用頻度の多少）ことば（熟知度の大小）をあげ，その三要因を組み合わせ，8つの条件をつくり，それによって選んだ漢字40に読みがなをふらせて調べた。被験者は小3，小5，中1で合計396人である。結果をまとめると，①学年の増加とともに読字率は増加する。②読字の困難点はどの学年についても同じである。③困難点として，漢字を示す際のことばの熟知程度が重要で，熟知している場合の方がよく読める。④漢字の出現頻度も困難点の一つで，頻度の多い方がよく読める。⑤字画については影響がないようである。

河井芳文(4)は読みにおいて語が呈示される形態を①ふりがなの有無，②文脈の有無という二つの条件を設定し，これらの条件が理解に及ぼす影響を発達的に調べた。刺激語として，語の使用頻度順位1から7000までを4段階にわけ，各段階から48個の名詞を選び計192個になる。各語を4つの刺激形式にわける。ふり仮名の有無(2)×文脈の有無(2)＝4。語い理解は評定尺度を用いた。すなわち，よくわかる，だいたいわかる，あまりわからない，ぜんぜんわからない。被験者は小3，小5，中1である。結果はまず，使用頻度の順位と理解度は一定の勾配をもって直線的に変化する。文脈の影響は各学年によって異なり，中1では文脈の効果は少なかった。小3

---

* Psychological Study on Reading

** SATO, Yasumasa (Tokyo University of Education

小5では効果がみられる。仮名の有無については，小学生の場合は仮名がある方がよかったが，中1ではあまり語の理解に関係はない。

阪本敬彦，高木和子(5)は読みとの関連において小学生を対象に接続詞，接続助詞の用法理解力の調査を行なった。その結果，①接続詞，接続助詞は4・5年で一応の発達を完成させること。②話しことばの接続助詞は2，3年でほぼ完成する。書きことばの接続助詞は2年ではむずかしいが，学年を追って発達する。これは，読みによって習得されるという。③接続詞の用法理解は書きことばの接続助詞と類似の発達をみせるが，文章全体の読みとりができないと正答にならないため，全般的に正答率が低くなっている。

岡田明(5)は氏がこれまで行なってきた読みの柔軟性に関するいくつかの研究のまとめを行なっている。すなわち，第一部は読みの柔軟性の発達で，①普通児の読みの柔軟性の発達，②弱視児の読みの柔軟性にわかれる。第二部は読書力訓練の読速度ならびに読みの柔軟性に及ぼす影響についてのべている。

佐藤泰正(7)は大学生を対象に速読訓練を行なった結果を報告している。具体的には大学生31名を対象に毎日約30分訓練を行ない，4週間の効果をみようとした。（実験には訓練を行なわない27名の統制群も作った。）訓練は読書材料（岩波新書）を時間をはかって読ませる方法である。訓練の前後にテストを行なって進歩を調べた。それによると，統制群にくらべて実験群はかなりの進歩を示している。訓練に用いたものと同種の読材料では統制群は進歩がほとんどみられなかったのに対し実験群は平均して約50％の進歩を示していた。スピードテストでも統制群は訓練前280秒だったものが，訓練後に258秒と23秒しか速度があがらなかったのに対し，実験群は280秒が177秒と，103秒もはやくなっている。

特殊児童

佐藤泰正(8)は盲学校中途編入者の点字触読能力を調べた。点字触読力検査を用いて341名の中途入学者を調べた。その結果は，①盲学校へきて2年以内のものは，一年一学期から盲学校に入学しているものにくらべて劣る。②点字学習期間を等しくした場合は，1年1学期から盲学校に入学した子供より，中途編入者の方が触読力が高かった。③中途入学者についても性差，視力差はみられない。また，全盲について5才以下失明と6才以上失明にわけてみても両者に差はない。学力との関係では，学力の高いものが触読力も高かった。

久保田正人(9)は読字，書字に選択的障害をもつ精薄児の事例を紹介している。この児童はI.Q.50で，言語面はよいが文字が全くわからず「い」の字を2つにわけてみている。週1回50分位約10ヵ月間文字の個別指導を行なった。はじめのうちは，たとえば，あめ，かさ，が読めてもあさを長考して，あつ，さくら等と読むなど，また，3字の語はほとんど不能であった。指導の例をあげると，いとかをイカの絵に対応させる。また，絵入り50音表をつくって字を探しつつ語また短文を書く練習などをさせた。学習は除々に進み，上述の困難も部分的に軽減しはじめた。はじめは2字しか読めなかったが，10ヵ月目には32字に読める字がふえていた。このように失行失認症的症状を併せもつ精薄児も字とイメージの対応を手がかりにかなり恢復が期待できるという。

読書不振児

阪本敬彦・高木和子(10)は読書不振児に関する研究を行なった。研究は大きく二つに分かれ，一つは読書不振児の診断法に関する検討，その二は読書不振児の特性に関する分析である。前者については知能検査と読書力検査を同じ被験者664人に行ない，知能偏差値から読書力偏差値への回帰直線をもとめた。かくて回帰方程式をもとに，知能偏差値を回帰方程式のXに代入して得られたYの値をもって彼の知能から期待される読書力水準であると考える。その期待値と実際の読書力との差を回帰読書力成就度とする。具体的には回帰読書力成就値＝期待読書力偏差値－実際の読書力偏差値である。回帰読書力成就値は，知能偏差値との相関は0に近く，読書不振児

に知能の高いものが多いという結果もでてこないし，読書不振の適確な診断が可能といっている。

第二部ではこのようにしてもとめた回帰読書力成就値をもとに，この値の平均より１ＳＤ以上劣るものを読書不振群，平均より１ＳＤ以上優るものを読書優良群として彼らにいろいろな調査を行なった。それによると不振群には女子より男子が多いこと。読書力の下位能力では，彼らは読速度，読理解が劣るが漢字はあまり優群と差がないこと，国語，算数の学力テストでも不振群は劣ること，両群の知能テストの平均は差がみられないが，下位テストについてみると，不振群は論理的思考，乱文構成など言語関係で劣るが，空間把握などはよい。不安テストでは両群の差はみられない。家庭生活環境などもあまり著るしい差はみられなかった。

読書療法

大神貞男(11)は夜尿症に読書療法を用いた事例を報告した。小学３年の男子，ＩＱ109，養護施設に収容中。父はバタ屋で性格異常，飲酒嗜癖，勝負事に熱中，負債も多い。母は本人２才のとき協議離婚し消息がない。問題行動は愛情障害からくる対人，対動物等の攻撃的行動が多い。協調性乏しく，曖昧，嘘言も多い，窃盗と共に夜尿も頑強。

治療は約３ヵ月，用いた読物はアンデルセン，親指姫，みにくい家鴨の子，マッチ売りの少女，愛の学校，きこえぬ鐘，ベーブルース物語，パンヤンの鹿の物語である。はじめは読んできかせ，20日目からは側について読ませた。読後の感想，話し合いを12回もった。はじめ80％の夜尿が28％と減少し，不適応行動も減少した。これは読書による家庭の象徴的満足を得たためであろう。少年自身の告白にもそれがみられる。

大神貞男(12)は非行少年の読書療法による治療例を報告している。この少年（17才，中卒，人夫，ＩＱ97）は道路上で自転車で通行中の女子高校生に騒ぐと殺すぞと首をしめあげ暴行を加えたほか，畑で遊んでいた小学３年の女子にも同様におどして自分の自転車にのせて約1.5K位略取した。家庭も貧しく，父親は酒飲みで気短か。母親は労働者である。治療は113日間，この間あたえた材料は，次郎物語，路傍の石，嵐，にんじん，仔鹿物語，真実一路，家なき少女，やまっ子六代目，美しい暦など８冊でいずれも家庭関係を扱ったものである。効果をロールシャッハテストによってみているが，好ましい変化がみられている。はじめは，ひどいエディプスコンプレックスをもっていたが，父親への敵意は次第に消えた。そして母親との関係も改善された。かくて，周囲の人々への態度も改まり倫理感も養なわれ理想自己を形成できるようになった。

そのほか，大神貞男(13)は暴行恐喝，窃盗，傷害という非行少年に行なった読書療法の治療例を報告している。

阪本一郎ら(14)は，品川区立のある小学校の６年生に矢田部ギルフォード性格検査を実施し，情緒不安定児６人を選び読書療法を行なった結果を報告している。そして，情緒不安定治療の方法として読書療法が効果的であったとしている。効果の現われ方に３つのタイプがみられた。①治療後ただちに効果の現われるもの。②一時的な反動の後に徐々に現われるもの。③直後はっきり変化をみせないが，徐々に現われるもの。また読書力の乏しい子供の場合は動機づけが重要であるとともに読後に話し合いによって印象を深めてやる必要があるとしている。シュロッダースがいっていた読書療法の原理である洞察，同一視，カタルシスがこの研究にも見出されたとしている。

半田茂雄(15)も読書療法の事例を報告している。一例の問題行動は，不純異性交遊である。少年12才，中１，読書材料としては，風の中の瞳，サムライの子，君たちはどう生きるかなどをあたえた。４ヵ月後には問題行動をおこすようなことがなくなり，かなりの改善がみられた。もう一例は個性の伸長に関するものを報じている。13才，中２の少女で知能偏差値60，内省的傾向が強いので，できるだけ自律性の育成をめざして読書療法が行なわれた。あたえられた材料は，あり子の記を中心に，そ

のほか君たちの天分を生かそう，車輪の下などである。結果は自律性の育成にほぼ成功したという。

読み易さ

河井芳文(16)は無意味線分パターンと文字パターンの弁別の比較を行なっている。文字の線分の数，線分の長さ，線分の角度の三つの要因の効果が無意味線分パターンと文字パターンとではどうちがうかを実験した。刺激文字パターンの部分の数をかえたり，部分の長さをかえたり，部分の角度をかえたりして，原刺激と同じか異なるかを幼児32名を対象に調べた。結果は，①刺激パターンが複雑になるにつれて正反応が減少し，また反応時間が長くなる。(無意味，文字両方をとおして)。②全般に文字パターンの方が無意味線分パターンより弁別が容易である。③パターンの一部の長さが異なる場合が最も弁別が困難である。次に困難なのが部分の欠如であり，角度の変化が最も弁別が容易である。

海保博之(17)は片仮名文字の見易さについて重回帰分析による検討を行なった。刺激としてはメッシュ文字（メッシュはたてよこ比が2：3のセル45個，たて9，よこ5つのセルから構成されている）46個を用いた。刺激文字は0.06，0.09，0.135，0.203の4つのノイズ量でセルのきめられた個所をランダムに変えて識別させた。見易さに影響する要因として冗長度要因4（横，縦，右斜，左斜）方向要素要因4（方向横，方向縦，方向右斜，方向左斜），出現頻度要因1，合計9つの要因をとりあげ重回帰分析法を用いて調べた。

結果は，①ノイズ水準で0.135の時以下の要因がもっとも見易さに関係した。②見易さの積極的規定要因は縦冗長度要因，左斜め冗長度要因，横方向要因，縦方向要因の4つであった。③右斜め冗長度と右斜め方向要因はほとんど見易さに関与しない。④出現頻度はネガティブな見易さの規定要因として作用していた。

作品分析

阪本一郎ら(18)は4コマ漫画のサザエさんの作品分析を行なった。それによると，この作品は4コマめにユーモアポイントを置いている作品が多く，失敗で笑わせている。失敗の原因としては，誤認，稚拙，脱線，善意過度，隠された理由等で，これらの人物の軽卒性と低格性とに帰せられる。ユーモアをおこすモチーフとしては，家族の自己感情の異常さにおかれている。失敗しては赤面するがそのフラストレーションを防止あるいは打開する点では児戯にひとしいものがある。

この作品は青少年期以上に発達している読者を幼児期の心理に退行させることをねらっていると思われる。そうすることによって，読者を作中の人物に投映させ，自己の成熟に気づかせる。その判断にユーモアをもっているとする。

つづいて，阪本一郎(19)は児童漫画「のらくろ」の作品分析を行なった。そして，①のらくろの生涯，②のらくろの説話形成，③のらくろの話根，④のらくろのテーマ，⑤のらくろのモラール，⑥のらくろの語りくちなどについての分析を行なっている。

さらに氏(20)は，冒険ダン吉についての作品分析を行なっている。そのなかで，冒険への動機のタイプを3つあげ，自発的挑戦，防害の克復，敵意への応戦にわけている。そして①より②や③の受動的なものが多くなっていること，主人公の冒険の多くは，冒険のための冒険であり，攻撃や略奪のためのものではないことをあげている。彼の冒険の83%は成功しているが，成功への武器は機智である。しかも，その成功は現実には不可能である。ファンタジックなトリックによるところのユーモアなのである。ストーリーの語りくちをみると浪花節や講談などの話芸の材料を生かして，絵との調和をはかっている。ストーリーはリズミカルであり，流暢であり，ギャグにみちている。物語の構成は事件のつみ重ねが連鎖的であることが特色で，原因，結果が並列的にならぶのでなくて，原因結果がつぎの原因となり，それから結果が生ずるわけだが，その原因結果がつぎの原因となるのである。したがって物語はスピード感が増してくる，としている。

参考文献

1. 村瀬旻：文字の読みあげ過程の分析　日心32回大会発表論文集　1967　7月　P117
2. 笠原尚子・横地清・小川純一郎：幼児における読みに関する研究　日教心第10回総会発表論文集　1968　10月　P52—53
3. 福沢周亮：漢字における読字の困難点の研究(1)　読書科学第11巻3号　昭43　3月　P16—21
4. 河井芳文：読みにおける語いの発達　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P22—29
5. 阪本敬彦・高木和子：小学生における文法力の発達(1)——接読詞・接読助詞を中心にして　日教心第10回総会発表論文集　1968　10月　P54—55
6. 岡田明：読みの柔軟性に関する研究　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P16—21
7. 佐藤泰正：大学生に行なった速読訓練の効果(1)　読書科学第11巻3号　昭43　3月　P12—15
8. 佐藤泰正：盲児の点字触読に関する発達的研究(3)　読書科学第12巻1号　昭43　12月　P25—35
9. 久保田正人：漢字書字に選択的障害をもつ精薄児の一事例　日心32回大会発表論文集　1968　7月　P299
10. 阪本敬彦・高木和子：回帰成就値による読書不振児の研究　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P1—15
11. 大神貞男：夜尿症児の読書療法による軽快例　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P48—51
12. 大神貞男：非行少年の読書療法による治療例　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P88—90
13. 大神貞男：非行少年の読書療法による治療例(9)　読書科学第11巻3号　昭43　3月　P22—28
14. 阪本一郎：情緒不安児に対する読書療法の事例研究　読書科学第11巻1・2号　昭43　1月　P88—90
15. 半田茂雄：読書療法の事例研究　読書科学第11巻3号　昭43　3月　P49—52
16. 河井芳文：無意味線分パターンと文字パターンの弁別の比較　日教心第10回総会発表論文集　1968　10月　P4—5
17. 海保博之：片仮名文字の見易さの規定要因　心理学研究第39巻1号　昭43　4月　P13—20
18. 阪本一郎：四コマ漫画「サザエさん」の分析　読書科学第11巻1・2号　昭43月　1月　P30—47
19. 阪本一郎：児童漫画「のらくろ」の作品分析　読書科学第11巻3号　昭43　3月　P1—11
20. 阪本一郎：冒険ダン吉の作品分析　読書科学第12券1号　昭43　12月　P18—24

SUMMARY

A. Reading Instruction

Since the revision of *The Course of Study* was published by the Ministry of Education this year, we have seen some discussions concerning the adaptation of this new curriculum on reading instruction. For example, H. Mochizuki insisted on the necessity of full discussion on teaching materials and on the importance of both making a plan and the integration of reading guidance. He also pointed out the importance of well-selected contents depending upon the goal of language education as well as the stages of a child's development. Besides, several existing schools of reading adovocated their unique teaching method with some revisions.

We could count 79 articles in scientific journals. They are classified as follows.

Reading materials and presentation	24
Teaching reading comprehension in general	19
Skills of reading comprehension	7
Process of teaching	6
On the new *Course of Study*	5
Evaluation	4
Reading instruction and reading guidance	3
Originality	3
Relation of reading to expression	2
Theory on the basis of reading	2
Reading and reading ability	2
Reading of an exceptional child	2

Among these activities the following were note-

worthy : E. Kurasawa's consideration concerning the new *Course of Study*, S.Hayashi's and K. Kobayashi's studies which pushed ahead the "single reading synthesism", H. Okiyama's theory of teaching construction, I. K. Sakamoto's opinion on the relation between "dokkai" (reading comprehension) and "dokusho" (reading for personality formation). But in general, activities did not seem to be as vigorous as the year before.

B. Reading Guidance

The fundamentals of the new *Course of Study* are not very different from the old ones, excepting the emphasis of reading guidance in the subject of language. On the other hand, consequently, it was noticed that reading guidance in the other subjects or fields of education was lagging.

Studies on reading guidance which appeared in journals were few and poor in quality. But a monthly magazine called "Education of Language" sprang up from Kokudosha Co. And serial book such as "Lectures on Reading Guidance in the Elementary School", were published in five volumes by Meiji Tosho Co.

About the revision of the *Course of Study*, H. Fujiwara, H. Mochizuki, M. Koshimizu, and a few others spoke. There were successive discussions on the relation between "dokkai" and "dokusho", and they are going forward to the conclusion that both are not essentially separated——the division is made only for convenience sake in the practical guidance planning.

Another point of discussion this year is about the proper subject for the teaching of the appreciation of literature. Hitherto, appreciation was taught as an extension of reading comprehension, but recently it came into the field of reading guidance.

For the purpose of the practice of reading guidance in the reading classroom, the publication of supplementary readers came into being.

The practical study of teachers progressed. They are going to build up the whole school system of reading guidance centered around the school library.

C. Psychological Studies

Concerning the reading process, an experiment was reported by A. Murase. He says that when the number of letters exposed through a tachistoscope is increased, the time required to read the last letter decreases.

On the development of reading, we had five reports. H. Kasahara and others reported that pictures were not necessarily important aids in reading among young children. S. Fukuzawa examined developmentally factors which hindered the reading of Chinese characters. Y. Kawai researched developmentally the influence of ways used to present words for their comprehension. T. Sakamoto and K. Takagi investigated the ability to use the conjunction. And A. Okada completed his research on the flexibility of reading. These are noteworthy as studies of basic skills in Japanese.

Y. Sato trained college students to read fast by the time-recording method for a period of four weeks, thirty minutes a day. He found that the experimental group became faster than the control group.

Y. Sato researched the ability of Braille reading of blindpupils who entered the intermediate course of the school for the blind. M. Kubota succeeded in reducing the reading difficulty of the weak-minded child by giving special guidance. Here it was found that the correspondence of letter to picture was profitable. T. Sakamoto and K. Takagi studied disabled readers.

出　版　界　の　展　望

東販出版科学研究所　河北憲夫

概況

昭和36年頃から異数の発展を遂げてきた出版業界だが，その高度成長に初めてカゲリが現われた。これが43年の最も大きな特徴である。勿論その一方では好ましい要因も少なくなかったが，問題としてのウェイトが前者に及ばなかったことは否めない。まずこの点を認識した上で，43年の主な動きについて述べてみたい。

第一に挙げられることは，書籍の売行鈍化とそれに関連する一部有力出版社のつまづきである。もともと我が国の出版市場は欧米に比較して言語による閉鎖性，限定性が強い。当然，出版物に対する需要の大半は国内市場に限られてくる。そうしたことから高度成長が華々しく進められた半面では，出版物の売行が次第に鈍るのではないかという懸念が持たれてきた。その懸念が43年になって以上のような形で現われたのである。特に書籍を主力商品とする有力出版社のつまづきは，一般的な書籍の売行鈍化という現象に生々しい実感を与えた。その結果紙・印刷などの関連業界や金融筋，更には読者の不信感が高まり，書籍の出版活動はにわかに低迷の色を深めて行った。もっとも，そうした一般の出版販売ルートとは裏腹に，割賦販売ルートが異常なまでの増高を記録したことは事実である。然し何といっても書籍の売行を左右するのは新刊企画である。その意味で大方の出版活動が年の半ばから低迷化したことは書籍の伸びを直接チェックする素地となった。いうまでもなく書籍は業界総売上の過半を占める商品であり，また過去6～7年に亘る業界の高度成長をリードした商品である。それだけに書籍の売行鈍化というカゲリの持つ意味は大きい。

主な動きの第二は雑誌の売行が一段と好調に推移したことである。その原動力となったのは読者の細分化を意図する出版企画の盛行にある。具体的にいえば，対象読者の年令層別横割り，趣味・嗜好・対象問題別の縦割り，或いは両者を併用する集約化など，焦点を絞った読書層の設定である。つまり個性化・専門化・多様化・分極化という，特に若い読者に見られる今日の生活風潮にマッチした雑誌づくりが大巾に展開されたわけで，事実これによって雑誌に対する関心や購読欲は従来のマンネリ性から脱して非常に弾力性を増したといえる。未曽有の創刊，それに増刊，別冊類のブームがそれを物語っているが，加えてややもすればポピュラーな分野に集中し勝ちであった好調の波が準硬派・硬派の分野にまで広がったことは十分指摘される価値があろう。

第三に挙げられることは，出版業界の総売上が初めて3000億円の大台に乗ったと推定されることである。書籍面での不調といった要因は要因として，ともかく業界の売上規模が一回り拡大されたことの意義は小さくない。出版エネルギーが3年振りに一つの節を抜いたと考えられるからである。

以上が43年の概況だが，次に商品別に見た興味ある出版傾向を市場背景とも併せて振り返ってみたい。

出　版　傾　向

書籍

---

* Scope of the general publication

** KAWAKITA, Norio (Institute of the Study of Publication, Tohan)

個人全集の盛況

数年来，いわゆる総合全集が踵を接するように刊行されてきたが，その半面でようやく前年辺りから個人全集が読者の注目を集めるようになった。そして43年には実に42点に及ぶ企画が刊行されるというかつてない盛況振りとなった。唯，個人全集の魅力は著者の個性と読者の個性との強い触れ合いにあり，従ってその部数は自ずから限られてくるが，それにしても年間40点を越える種類が数えられたことは総合全集の頭打ちということだけでなく，読者の嗜好の拡がりによるものとして注目される必要があろう。著者は洋の東西に亘って多彩だが，中でも〝アリストテレス全集〟や〝本居宣長全集〟などの古典思想ものがこの種の全集としては予想外の売行となった。ともかくマスプロ，マスセールが一つの合言葉となってきた出版業界にとって，個人全集という典型的ミニプロ企画がそれなりの成果を収めたことは43年の興味ある傾向といえよう。

総合文学全集の低調

43年に創刊された主な総合文学全集は〝デュエット版世界文学全集〟〝新案世界の文学〟〝新潮日本文学〟〝現代日本文学大系〟の4点である。試みに年間全集ベストセラーズ（上位20位）に登場した全集を見ると，殆んどが年を越えて刊行されてきたもので，新規全集では僅かに〝新潮日本文学〟が20位にランクされたに過ぎない。いうまでもなく全集の部数は巻を追って縮少する傾向を持つが，そうした点を勘案してもいかに43年の新規全集が振わなかったかがわかる。唯，総合文学全集の枠を拡げて児童ものも含めるとすれば〝カラー版名作全集・少年少女世界の文学〟〝少年少女・世界の名作文学〟の上位進出が目立っている。とはいうものの華やかな全集時代を象徴した文学全集が大きな曲り角にさしかかったことは最早否めない事実となった。

百科事典の根強い売行

36年の〝国民百科事典〟以後，既に10指に余る銘柄が出廻りその普及も急ピッチで伸びてきたが，43年も依然として根強い売行を見せた。前年創刊の〝ジャポニカ〟に続いて43年には〝原色現代百科事典〟が新らしく登場して好調である。また児童関係では〝学習こども百科〟の創刊があり，この売行も悪くない。なお前年刊行された婦人向の〝実用百科事典〟〝新家庭百科事典〟も年を越えて売れ継がれた。加えて先に概況でも触れたように割賦販売が完結百科事典のセット売りで大巾な伸長を示しており，百科事典に対する需要は教養・教育熱，或いは核世帯化などを背景に43年の数少ない大型書籍としての実績を示した。

高額美術書に対する人気

3～4年来，高額図書の刊行や売行は年々活発となっているが，この傾向は43年に入って一層盛り上った。それを代表するのが美術の豪華本である。明治100年のキャッチフレーズによる復古ムードの盛り上りも大きな要因となって古美術関係の豪華本が旺盛に出され，また小部数なりに充実した売行を示した。主なものを挙げると〝宮本武蔵筆午眠布袋〟〝源氏物語絵巻〟〝正倉院絵画〟〝宮廷の庭〟〝日本の文様〟〝奈良六大寺古観〟〝小袖文様〟のほか〝日本文学色紙全集〟〝愛蔵版浮世絵版画〟などだが，なおこれらの豪華本と同時に見逃せないのが美術全集である。一巻当りの定価は2,000円前後ながら例えば〝原色日本の美術〟（全20巻）〝原色世界の美術〟（全18巻）が全集ベストセラーズに連続登場したことはやはり美術書に対する人気の強さを裏付けている。

簇出した明治100年もの

明治100年を記念する出版企画は既に前々年からも出ていたが，43年はその決定版の年となった。然し数多くの関係書が色々なジャンルに亘って刊行された割には，むしろ類書の氾濫という観が強く，広く読者にアピールする程の作品には乏しかった。やはりこの種の本は単なる記念事業的或いは便乗的作品ではムード倒れに終り易い。唯そうした中での〝日本を決定した百年〟や〝近代日本総合年表〟或いは豪華本に類する〝明治百年の歴史〟〝写真図説明治天皇〟〝明治百年の児童史〟がかなりまとまった売行で注目された。また若干観点は違うが，歴史小説としての〝竜馬がゆく〟が話題のベストセラーと

なったことも明治100年とのタイミングに負うところが少なくない。

法律入門書の賑い

前年下期に出始めた佐賀潜による一連の法律入門書は43年に入って累月ベストセラーズを賑わせた。即ち〝民法入門〟から始まって刑法・商法・労働法・道路交通法と続くシリーズだが，その延登場回数は過去に例を見ない記録となった。個人を取り巻く社会や団体，或いは人間関係の複雑化とトラブルが現代社会の断面とすれば，それに対する処方箋もまた必要度を増すわけで，法律入門書の魅力もその点にあろう。もっとも反面からいえることはベストセラー作りにシリーズによる連鎖効果の積み上げが取り入れられたことである。これは前年の〝頭の体操〟（1—4集）でも見られたことだが，こうしたいわばシリーズのトータル・イメージ・アップの効用は一発を狙うベストセラーが次第に難かしさを加えているだけに注目される動きといえよう。

ハードカバー本が伸びた文学書

全体として余り冴えなかった文学書だが，一つ興味があるのは従来比較的低調だったハードカバー本が活発に動いたことだ。先に触れた〝竜馬がゆく〟を初め〝不信のとき〟〝皇女和の宮〟〝舟場〟〝続・徳川の夫人たち〟〝黒部の太陽〟〝流れる雲〟〝黄いろい舟〟〝三匹の蟹〟〝青春の記録〟といった作品で，ノンフィクション分野でのペーパーバックスとは対照的に，フィクション分野におけるハードカバー本の優勢を如実に示した。一般に文学書では女性読者のウェイトが非常に高いが，ペーパーバックスはスタイルや格調といった面で女性の嗜好を余り越えていない。また，そうした点とも関連して推理小説に話題作が乏しかった事も指摘されよう。僅かに〝Dの複合〟その他2・3点がベストセラーズに登場した程度で女性読者の問題とも併せてフィクション分野におけるペーパーバックス不振の原因となっている。

相変らず出た人生もの

数年来，人生ものは出版企画の一つの流れとなってきたが，43年にもそれが受け継がれた。広い意味で次のような作品が挙げられよう。即ち〝どくとるマンボー青春記〟〝愛〟〝ゲバラ日記〟〝父小泉信三〟〝愛しかた愛されかた〟〝心の帖〟〝無くてならぬもの〟或いは〝ガマの聖談〟などである。また以上とは別にいわゆる占いものがある。太平時代らしくレジャー色の強いアウトサイダー的人生もので，37年の〝易入門〟（その年のベストセラーNo. 1）以来，例年売行は悪くない。43年も，〝十二支〟〝五味人相教室〟〝姓名判断〟〝ジプシー占い〟〝十二支物語〟などが売れた。ともかく人生ものは急激に変化する世相の香辛料として枯れないファンを持ち続けているが，唯，全集企画に関しては前年をピークとして全く下火となり，僅かに年一巻のペースで刊行されている〝人間革命〟が全集ベストセラーズのトップに進出した程度で終った。

全学連・安保ものに対する関心

学園での反体制から，羽田事件，佐世保事件，王子事件，成田事件などをきっかけとして全学連の動きはエスカレートの一途を辿ったが，そうした背景でいわゆる全学連ものが次々と刊行されてかなりの売行となった。〝全学連〟〝全学連は何を考えるか〟〝ゼンガクレン〟その他数点がそれである。又そうした動きは当然，70年安保にもつながるものであり，年の終りにかけて安保ものが次第に出遇り始めた。しかし本番の70年にはまだ遠く，プロローグの域を出ないが，ともかく43年が学生運動を母胎とする大学紛争の記録，更には安保出版物に対する関心を高めた年となったことは事実である。

ノーベル文学賞と川端ブーム

我が国に初めてもたらされたノーベル文学賞だけに川端文学に対する人気は爆発的な様相を呈した。従来の在庫が底をつき，急拠再版されたものも忽ち吸収されるという売行を示した。勿論，売行のスケール自体はいわゆる大物企画としてのベストセラーに及ぶものではない。唯，春の有力出版社のつまづき以来，沈滞を続けた出版業界にとってノーベル文学賞の持つ明るい心理作用，更には日本文学に対する読者の再認識といったむしろ無形の効用における意義を評価しておきたい。

雑　誌

伸びた趣味関係誌

前年好調のうちに推移した趣味関係誌は43年も前年を更に上廻る売行となった。特に音楽誌・美術誌・スポーツ誌の伸びが大きい。

いうまでもなく趣味の多様化・個性化が好調の要因となっているが，その中で映画・演劇を対象とした芸能誌だけは依然としてジリ貧状態を辿っている。テレビによる影響は勿論として，読者自身が参加できる，より生活的な趣味に対する関心の高まりがそうした明暗をもたらしたといえよう

児童月刊誌の消長

数年来，児童誌出版ではマンガ・コミックスが有力なアングルとなってきた。様々なコミック誌の去来がよくそれを物語っているが，そうした動きは43年でも変らない。然しコミック誌と銘打つ雑誌だけでなく，一般の児童月刊誌，特に児童週刊誌でも編集内容に占めるコミックスのウェイトは増えており，それだけ従来興味あるアングルとされてきたコミックス自体の持つ意味は変ってきた。殊に月刊誌についてそのことが指摘されるが，一見華々しいコミックス的風潮の割に売足は重い。勿論児童月刊誌ではその半面で教育的要素を持つ学年誌，未就学誌の強い伝統があり，むしろこれが43年における児童月刊誌の支えになったといえる。新らしい動きとして注目されるところだ。尚，かつて児童月刊誌に君臨した〝少年〟が休刊されたことも付記しておきたい。

賑わう青年マンガ誌

幼少年層から発生したマンガ熱はその世代の生長と共に青年マンガ誌を生むこととなった。いわゆるヤング・テレビ・エージの出現とその映像的感覚の産物である。事実43年には実に15点に及ぶ月刊の青年マンガ誌が続出しており，マンガ月刊誌の総点数40点の4割弱が43年に大挙出現したことになる。ところでこの種の雑誌としては，月刊誌とは別に週刊の3誌があるが，両者の競合は殆んど見られない。こうしたことからも，まさに43年は大型マンガ・コミックス時代到来の年であったといえるようだ。

婦人関係誌の中の変化

前年に続いて婦人向雑誌間の消長が続いた。即ち一般総合家庭誌と，編集対策を絞った生活誌の動きだが，端的にいってその売行は前者が伸び悩み，後者が好調である。いうまでもなくその大きな理由は生活規模の変化と先にも触れた趣味の多様化，個性化にある。殊に新らしい結婚世代の特徴が男のマイホーム主義，女のマイライフ主義にあるとすれば，婦人関係誌間での消長は十分留意される必要があろう。

中間小説誌の人気

2・3年来，男性雑誌なる分野が活発に開拓されてきたが，そのエッセンスともなった男臭さが，従来のいわゆる中間小説誌にも持ち込まれた。その結果，中間小説誌は著しく風俗的傾向を強め，これがあたかも新雑誌の出現に似た形で人気を得た。勿論これまでも数多くの大衆的風俗誌が出ているが，それらにない風俗性，或いはそれらの読者となり得ない読者層の風俗的欲求が新らしいセミエリート的風俗誌を定着させたともいえよう。

ティーン週刊誌の創刊

こどもと大人の端境期に当る中学から高校へかけての年令層は，かつて出版企画にとって不毛の地帯とされていた。その年代独自の読書対象に明確な線が描けなかったからである。つまりその年代を幼いままの読書態度で通過するか，飛躍して大人の読物と結びつくかの何れかが，この年代層の大半と見られていたのである。ところがここ数年来，テレビの影響や心身成長におけるアンバランスといった現代っ子の特徴が新たにその年代を捉える出版企画の可能性を生んだ。既に女子を対象としたいわゆるジュニア文芸誌のスタイルにその可能性を明らかにしたが，43年にはそれに次ぐものとしてティーン週刊誌が創刊された。女性雑誌のマーケット拡大として注目しておきたい。

以上，43年における出版物の売行および出版傾向の大

要を述べた。全体として明暗と消長の交錯する年であったといえるが，それだけに長く大型景気を体験してきた業界にとって事態の持つ意味は小さくなかった。高度成長の終息と安定成長への転換がはっきりと意識されてきたのもそのためである。雑誌の好調は好調として，書籍に関しては全集，ペーパーバックスなどのマスセール商品に見られる頭打ちによって今後かなりの地固め的過程の続く事が予想される。また一方，出版物を取り巻く環境にしても大学紛争による授業正常化の停滞など読書を阻害する事態が激化しつつある。何れも出版業界の安定成長にとって楽観できない条件だが，それを如何にカバーして行くか，44年に持ち越される問題は小さくない。

SUMMARY

Our publishing world has grown extraordinarily since about 1961, but a ahadow appeared over it this year. There were, however, some bright spots slso.

First, it should be mentioned that our book market suffered some deterioration, owing to mistakes on the part of some leading publishing companies. Our publication market has always been limited to our own country because of the language restriction. So, until the beginning of this year, the publishing world seemed to have reached a new high, but after the first half of 1968, book activity began to wane.

The serial publications of general literature reached a plateau. Instead, many individual collections began to appear. Among them were Yasunari Kawabata, winner of the 1968 Nobel Prize for Literature, Aristotle, and Norinaga Motoori (a Japanese classical scholar in the 18th century).

More than ten sets of encyclopedias continued to be in great demand. Generally, high-priced books are increasing, such as those containing colour prints of the fine arts. The catch-phrase "A Hundred Years of Japan" sold books which were planned to comemorate the opening of Japan to the Western world in 1868.

In the list of best-sellers, books of introduction to law, philosophy of life, and comment on the Zengakuren (militant student group) were notable.

The second trend was the favorable turn of magazine circulation. The cause seems to be due to success of dividing readers into smaller classes. For instance, some magazines divided the readers by their ages, some divided them by their tastes, hobbies, or objects of interests, and some both ways. Namely, magazines were differentiated to set subscribers, so their interests were more stimulated than ever.

Especially, hobby magazines such as those on music, fine arts, and sports were prosperous. Some comic magazines for boys and girls appeared, and some disappeared.

Some weekly magazines for adolescents sprang up, introducing senior comics. The differentiation of ladies' magazines was also popular. General ones reached a saturation point, and specialized ones were favorably received.

The third trend was that the total proceeds in the publishing world broke through the line of three hundred billions yen. In spite of the fact that books were losing ground, the total publishing activity became more energetic than ever. Thus, for the overall book trade, we have many problems to solve —problems which began in 1968.

貸本業界の展望*

貸本屋と利用者

全国貸本組合連合会　鍵山正人**

1. 貸本界の概観

貸本が庶民の健全な娯楽読物として喜ばれてきたことは現代でも変りはない。（ただし，学術書・技術書・実用図書・辞書・および俗悪図書は貸本になり得ない。）

戦後，貸本は燎原の火の勢で，2～3年の間に全国津々浦々にまで侵透して行った。これを取扱った業者の数は，組合に組織されたもの8,000店，未組織をいれると1万数千店と推定されている。

当時の貸本人口の80%は小・中学生であり，貸本として稼動する出版物は漫画を主に，少年・少女誌が，これに比例していた。

これら顧客の要求に応ずるため，数社しかなかった漫画出版社も，たちまち数十社が出現し，専ら貸本向漫画の出版に当った。然し，これも間もなく少年・少女の貸本人口の減少と共に消滅し，現在僅か数社だけが残っている。それも貸本向専門の出版というわけではない。同時に大出版社が漫画出版に乗り出してきている。

貸本人口減少の主たる原因は，激しい受験地獄が小中学生から娯楽としての読書時間を奪ったこと，そして何よりも，テレビが一般貸本読者を吸収するようになったことであろう。その急速な普及の度合に反比例して貸本人口は減少し，又，業者数が減少した。

昭和30年頃から下向線をたどり始めた貸本業界は，昭和35年頃になると，ぽつぽつ転廃業者が目立つようになり，昭和38～9年頃には大量の転廃業者を続出させたのであった。

地方小都市に於ては組合員業者の減少によって組合を解散したところも少くない。

現在，全国貸本業者の数は2,500の組合員と未組織をいれて3,500と推定される。

このように小・中学生読者の急激な減少傾向に遭遇して，業者は特に成人読者の獲得に力を入れるようになった。その結果，貸本人口中の成人の比重が大きく延びてきている。

そして，残存の店だけが大都市内の周辺地域に根強い地盤を張りながら発展し続けている。

2. 貸本利用状況

今日の大都市に於ける貸本利用状況を調査資料に基いて考えてみう。（資料は東京・神奈川のA級B級C級の標準的な貸本店12を抽出して，昭和44年3月まで過去1年の実績をもとにして作成したものである。）

表1　貸本屋とその会員

店名	立地条件	実働会員数	1日平均貸出人員	1日平貸出し冊数	学生 小・中高・大	勤め人その家族	商業その家族
A	勤労者住宅を控えた商店街	900	100	130	40%	30%	30%
B	商店街	700	80	100	60	30	10
C	勤労者住宅を控えた商店街	600	60	80	50	30	20
D	商店街	2,200	200	300	40	40	20
E	商店街	1,800	150	200	50	35	15
F	住宅地	3,300	220	300	25	70	5
G	商店街	2,000	150	220	50	45	5
H	商店街	2,500	170	250	45	40	15
I	商店街	400	40	60	40	55	5
J	住宅地	400	50	65	50	50	0
K	商店街	1,100	70	100	45	50	5
L	勤労者住宅を控えた商店街	600	50	70	80	20	0

* The rental bookstores and their users

** KAGIYAMA, Masando

東京の場合は貸本店は環状線の外側及び中央線に沿った地域が目立っている。なお貸本業界に於ては青少年条例の関係で18才以下とそれ以上を区別して居るので，ここでは18才以上は成人の部に入れた。その方が業態の実情にも合っている。

表 2　貸本会員年令内訳

本表中，「男割」の欄は，男女に分けると男子が何割を占めるかを示す。例えば「6」とあれば男子が6割で，残りの4割は女子という意味である。以下同じ。

店	小学生		中学生		高校・同年代		18～50才		50才以上	
名	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	20	4	20	4	15	6	45	4	0	
B	20	5	40	3	10	6	30	5	0	
C	35	5	15	5	5	4	45	4	0	
D	15	4	15	5	20	6	50	5	0	
E	10	6	30	8	10	5	45	5	5	5
F	20	5	15	4	15	5	50	4	0	
G	15	5	15	5	10	5	60	5	0	
H	10	5	15	6	5	5	70	6	0	
I	0		20	5	10	8	70	5	0	
J	10	4	40	3	30	3	20	4	0	
K	20	5	40	5	20	4	20	6	0	
L	20	4	40	4	20	10	15	5	5	5

1.　貸本屋とその会員

表1・2のように読者は学生層が多く，次いで勤め人とその家族であるが，商業従事者は案外少ない。

年令別にみると，小学2～3年から50才までであり，この数年成人の貸本人口が大きく伸びて以前の少年少女の位置にとって変りつつある。

表 3　図書の種別と利用状況

店	単行本		漫　画		月刊誌		週刊誌	
名	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	20	4	40	5	20	4	20	0
B	20	5	40	5	20	5	20	1
C	35	7	40	6	20	5	5	0
D	50	6	20	6	20	4	10	3
E	20	8	30	7	30	3	20	5
F	30	6	30	6	30	3	10	4
G	15	5	30	7	35	4	20	5
H	15	5	30	7	35	6	20	5
I	50	6	20	6	20	6	10	0
J	10	4	5	7	25	2	60	2
K	20	4	50	5	30	4	×	
L	10	6	50	5	30	4	10	5

（×印は貸出しせず，以下同じ）

成人につづいて小学生，中学生高校生の順である。これを男女別にみると高校生で男が多く，他はいづれも女の読者が多い。

2.　図書の種別と利用状況

さて貸本を単行本（全集物を含む），漫画，月刊誌，週刊誌に大別して表にすると表3のようになる。

漫画は以前ほど大きな比重は占めていないが，それでも矢張り第一位である。次に月刊誌，単行本，週刊誌であり，男女別にみると漫画，単行本では男が多く，月刊誌，週刊誌では女の読者が多くなっている。そこで以上の分類を年令別に考えてみる。

表 4　漫画の読者

店	小学生		中学生		高校・同年代		18～50才		50才以上	
名	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	30	4	50	5	0		20	10	0	
B	10	4	60	5	0		30	10	0	
C	40	6	30	5	15	8	15	8	0	
D	7	5	33	6	30	6	30	7	0	
E	15	5	40	7	30	7	15	8	0	
F	15	4	40	4	15	5	30	7	0	
G	30	5	20	5	10	9	40	8	0	
H	15	5	20	5	10	9	55	8	0	
I	20	4	30	3	0		50	8	0	
J	15	4	40	5	30	5	15	9	0	
K	25	5	40	6	20	5	15	4	0	
L	30	4	40	6	20	9	10	10	0	

3.　漫画の読者

表4のように近年漫画を読む成人がふえてきたことは特徴的である。これらの読者層を意識した漫画が出版され出してきた。これは数年前までにはみられなかったことである（従来も全然なかった訳ではないがとりあげる程の量ではなかった）。

年令別にみると中学生，成人，小学生，高校生の順となる。

男女別では小学生は女が多く，中学生，高校生，成人と高年代になるほど男の読者が断然多くなってきている。

4.　単行本の読者

表 5　単行本（全集物を含む）の読者

店名	小学生		中学生		高校・同年代		18～50才		50才以上	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	0		0		10	4	90	5	0	
B	0		0		10	4	90	7	0	
C	0		0		10	6	90	6	0	
D	0		0		10	7	90	6	0	
E	0		5	0	10	2	80	5	5	5
F	0		0		10	5	90	4	0	
G	0		0		10	0	90	6	0	
H	0		0		0		100	6	0	
I	0		0		10	7	90	6	0	
J	0		0		10	3	90	4	0	
K	0		0		5	9	95	3	0	
L	0		0		10	10	85	5	5	5

表5によって貸本店で，単行本を借り始める年頃は高校生時代からであることがわかる。表中，中学生の5％はハイティーン女生徒向の読物で，女子の方が男子より早くから単行本に親み始める。僅かながら50才以上の利用者もあり，男女別では男の方が多い。

少年・少女向の単行本は貸本では利用されていない。

表 6　月刊誌の読者

店名	小学生		中学生		高校・同年代		18～50才		50才以上	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	10	4	20	4	10	5	60	4	0	
B	10	4	20	5	10	4	60	5	0	
C	40	5	10	5	10	4	40	3	0	
D	10	7	10	7	10	4	70	4	0	
E	10	5	15	7	15	4	60	4	0	
F	15	4	30	3	15	5	40	3	0	
G	10	5	10	10	5	5	75	5	0	
H	5	5	5	5	5	5	85	5	0	
I	10	5	30	6	10	5	50	4	0	
J	10	4	20	4	10	4	60	3	0	
K	10	5	20	5	10	6	60	3	0	
L	20	6	40	6	5	7	35	3	0	

5.　月刊誌の読者

月刊誌は成人が過半数を占め，中学生，小学生，高校生の順である。

男女別では女の読者が遙かに男を引離し，男が女より多い店は一店もない。中学生に於て男が多くなっているが。他はいずれも女が多い。

表 7　週刊誌の読者

店名	小学生		中学生		高校・同年代		18～50才		50才以上	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	10	6	10	6	30	7	50	7	0	
B	0		20	6	10	3	70	2	0	
C	0		0		0		100	3	0	
D	0		10	9	10	6	80	1	0	
E	10	5	10	5	10	5	70	5	0	
F	20	4	30	4	10	5	40	4	0	
G	0		0		10	5	90	4	0	
H	10	5	10	5	10	5	70	5	0	
I	10	6	20	5	10	3	60	2	0	
J	5	4	5	4	10	3	80	1	0	
K	×		×		×		×		×	
L	20	6	35	7	15	8	30	1	0	

6.　週刊誌の読者

ここ数年会員の要求に応えて週刊誌を貸出す店がふえてきた。週刊誌の読者は圧倒的に成人女子であり，中学生，高校生，小学生の順になっている。高校生に於ては男女同数であるがその他は男が多い。然し，全体に占める割合は小さい。

以上を通じて，住宅地で商店街から孤立した貸本店（F・J）に於ては特に女性読者が多いことが目立つ。

では次に，漫画，単行本，月刊誌，週刊誌についてその傾向を簡単にみることにする。

7.　どんな漫画が読まれているか

貸本用漫画は殆んど少年，少女向であるが，前述のよ

表 8　漫画の種類別読者

店名	S.F.推理		時代物		スリラー		ユーモア		スポーツ		ロマン物	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	5	6	5	10	60	4	15	4	10	7	5	0
B	5	6	5	9	60	3	15	3	10	9	5	0
C	×		30	10	30	2	25	8	10	10	5	0
D	20	7	20	9	15	1	15	5	20	9	10	0
E	20	5	10	9	20	2	20	5	20	9	10	0
F	10	10	20	9	20	5	20	5	20	8	10	0
G	10	10	25	10	15	5	30	5	10	10	10	0
H	10	10	25	10	15	5	30	5	10	10	10	0
I	×		30	10	×		10	5	30	10	30	0
J	5	7	30	9	20	2	25	6	15	9	5	0
K	5	10	20	10	20	2	25	6	25	10	5	0
L	5	10	25	6	10	5	25	6	25	10	10	0

うに成人読者もふえてきた。白土三平の「忍者武芸帳」「カムイ伝」を始め，その他の作家の時代物，ユーモア，推理物等が成人層に侵透しつつある。

ユーモア物のうち長谷川町子（「サザエさん」，「いじわるばあさん」其他）は男女年令を問わず広く家庭で読まれている。スリラー物は殆んど少女向であるが，男の子にも人気があり，貸出し比率は第1位である。以下ユーモア，時代物，スポーツ，ロマン物，推理物の順になっている。

ロマン物の読者は100％女の子であり，推理，時代，スポーツ物は圧倒的に男である。ユーモア物でも僅かであるが男の読者が多くなっている店もある。

表 9　単行本・全集類の種類別読者

店名	純文学		通俗小説		推理小説		時代小説		戦記物		教養趣味娯楽	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	10	4	50	6	30	6	10	9	×		×	
B	5	7	60	6	30	7	5	8	×		×	
C	2	2	8	7	60	6	20	6	×		10	4
D	8	6	30	7	25	7	20	7	7	10	10	5
E	10	5	40	10	40	7	9	8	1	10	×	
F	10	5	25	7	40	6	10	6	5	10	10	3
G	0		55	7	40	7	5	7	×		×	
H	0		55	7	40	7	5	7	×		×	
I	0		40	6	30	7	30	10	×		×	
J	0		45	3	45	6	10	4	×		×	
K	0		30	6	50	6	20	6	×		×	
L	0		35	7	50	6	15	6	×		×	

8.　どんな単行本が読まれているか

単行本は推理小説，通俗小説（風俗小説を含む）が大部分を占めている。時代物の分野では品不足，特に書下しの魅力ある作品が少ないため，これらの読者が推理小説や通俗小説に移る場合が多い。然し，旧作も，テレビ化，映画化で盛んに宣伝されると，再版物であっても相当数の読者を作り出している。「風林火山」や「天と地と」等はその例である。

純文学が意外に少ないのは，貸本読者の大部分が貸本屋に求めて居るものは主として娯楽的読物であることがわかる。教養，趣味，等も僅かながら動いて居るが，これは全国的にみても取りあげるほどのものではない。

単行本の大部分を占める通俗小説，推理小説，又、時代小説では，女性は男性の半分である。僅かに純文学，教養書に於て男性を押えているが，単行本全体の中では極く僅かの部分である。

表 10　月刊誌の種類別読者

店名	婦人誌		服装誌		映画誌		読物誌		総合誌		趣味娯楽		少年誌		少女誌	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	50	0	5	0	10	4	5	6	0		×		20	6	10	0
B	30	0	5	0	5	5	30	9	0		×		20	7	10	0
C	35	0	5	0	20	4	5	8	0		×		30	8	5	0
D	40	0	15	0	16	6	13	6	1	6	5	10	7	10	3	0
E	40	0	10	0	10	2	15	8	1	8	5	10	10	9	9	0
F	30	0	10	0	10	5	19	9	1	10	×		15	10	15	0
G	25	0	15	0	10	2	9	9	1	10	×		20	8	20	0
H	25	0	10	0	10	2	18	8	1	10	1	10	20	8	15	0
I	30	0	10	0	10	0	30	7	×		×		15	10	5	0
J	60	0	10	0	10	2	10	4	×		×		5	9	5	0
K	50	0	10	0	10	5	10	5	×		×		15	9	5	0
L	35	0	5	0	10	5	×		×		×		25	9	25	0

9.　どんな月刊誌が読まれているか

月刊誌読者は成人婦人が大きな部分を占めて居るが，なかでも家庭の主婦の比重が非常に大きい。

成人男子に読まれるものは小説を主とした刊行物（「オール読物」，「小説新潮」，「小説現代」，「現代」，「宝石」，「大衆誌」等）と映画誌であるが，月刊誌全体に占める割合は少ない。

内訳は婦人誌が断然他を引離して王座を占め少年誌

表 11　週刊誌の種類別読者

店名	漫画もの		映画凡明平星		女性読物		青年読物		実話もの		少年もの		少女もの	
	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割	%	男割
A	×		30	0	60	0	×		×		5	8	5	0
B	×		20	5	70	0	×		10	5	×		×	
C	×		15	0	80	0	×		×		3	10	2	0
D	10	10	5	2	50	0	5	10	0		15	10	15	0
E	20	10	15	1	30	1	5	10	0		15	10	15	0
F	20	10	10	1	30	0	×		×		20	10	20	0
G	10	10	30	2	40	0	15	10	5	10	×		×	
H	10	10	20	2	20	0	3	10	2	10	25	8	20	0
I	×		×		60	0	×		×		20	10	20	0
J	10	10	5	5	60	1	5	10	×		10	10	10	0
K	×		×		×		×		×		×		×	
L	×		10	4	30	0	×		×		30	8	30	0

成人向読物，月刊誌，少女誌，映画誌，服装誌の順になっている。綜合誌(中央公論)，趣味娯楽等のものは言うに足りない。興味あることは少女誌を読む少年は零に等しいが，少年誌の分野に少女が進出してきていることである。

10. どんな週刊誌が読まれているか

週刊誌でも月刊誌同様成人婦人向出版物が大きな比重を占めている。然し，ここでは主婦を対象とした月刊婦人誌の場合とちがって女性読物にはハイティーンの進出が目立つ。

成人男子は漫画もの，青年向週刊誌（プレイボーイ，平凡パンチ)，そして，映画，実話物の読者であるが，全体に占める比重は小さい。

順位は女性読物が大部分を占め，映画，少年，少女，漫画，青年向，実話物となっている。

11. むすび

以上みてきたように，貸本は学問探究，技術習得とか，日常生活の実用に役立てるとかを目的としたものではない。また俗悪図書，低俗出版物が全くかえりみられないのは，健全な慰安，娯楽を各階層，各年代の男女が幅広く求めて居るものと思われる。

映像からは得られない娯楽性を持つ貸本は，今後も，自らの分野を広く深く開拓しながら一層庶民に親まれてゆくであろう。

社会情勢，経済事情は婦人読者層の月刊誌，週刊誌の利用状況にもみられるように益々普及拡大して行く傾向にある。

全国的にみれば，この十年間，貸本業者は大量に減少したが，残った業者が大都市に於て益々市民に利用されていることは何よりもこのことを示している。

貸本屋の実態調査*

東京都北区における事例

図書館短期大学　清水弘子　冨沢木実
横尾とみ子　宮井博子**

I まえがき

われわれは，公共図書館を理解する一助として，大衆の読書機関である貸本屋の実態を調査した。北区内の貸本屋16軒，隣接地の貸本屋3軒，計19軒を対象としたがこの地区を選んだのは別に意図があるわけでなく偶然である。

この区の面積は 20,550km², 人口は 436,662名で，とくに20才代が多い。産業別就業人口構成は，多いものから建設製造業(23%)，御・小売業（14%)，サービス業（8%)，運輸通信業（4%）等となっている。職業別には，生産・運輸関係，事務関係，販売・サービス関係が大部分を占めている。1軒あたりの平均収入月額は 82,399円で，都の23区の第19位。支出月額は 45,021 円で，教育費はその 1.77%（都3.81%)，教養娯楽費は 6.11%（都6.45%）で，いずれも低いほうである。

調査は昭和43年3月に実施した。その結果おもなデータは次のようである。

II 経営について

1. 開業の時期　開業は 16 軒が昭和 28～35 年の間で，そのうち33年がもっとも多く年間に7軒が開業している。ちょうど貸本ブームと呼ばれる時期に当たる。東京都貸本組合連合会が結成されたのは32年である。その後30年代後半は貸本界が不振になるので，新規開業は，

* A report on rental bookstores

** SHIMIZU, Hiroko ; TOMIZAWA, Konomi, YOKOO, Tomiko ; MIYAI, Hiroko (Junior College of Library)

41年の1軒を除いて，まったくない。開業の動機は，「内職として」が10軒，「生計のため」が8軒である。

2. 営業形態　貸本を専業とするものは8軒，副業とするものは10軒であるが，純粋の専業は4軒，貸本のほかに新本・古本・週刊誌・菓子店などを兼ねているものが14軒である。これらの形態別に貸出冊数を見ると，営業成績との関係はないようである。

3. 店舗　18軒のうち借店が13軒，他は自分の店である。別に支店を持っているものが2軒ある。

4. 店舗面積　平均坪数は2.8坪で，最低は1坪，最高は4坪である。坪数と貸出冊数との間には正の相関がほぼみられる。

5. 使用人　18軒の全てが使用人なしに家族員だけでやっている。

6. 休業日　8割は不定期に月1～2回休業している。

III　仕入れについて

1. 方針　仕入れに重点をおいているのは，マンガ（7軒），雑誌（3軒）であって，ほかに共通点が見られない。大体において客の要求に応じて判断しているらしい。

2. 新本・古本　すべて新本を仕入れているが古本をも入れているものが6軒ある。

3. 所有冊数　概算ではあるが，雑誌を除いて，500冊から4,000冊の範囲で，平均1,640冊である。単行本のうちマンガと読み本とはほぼ等しい。雑誌のタイトル数は10～70冊にわたり，平均39冊となる。

IV　貸出方法について

1. 会員制　登録会員制をとっているのは18軒中12軒で，$^2/_3$は入会金を10～50円とっている。会員制でない場合は身分証明書の提示を求めたり，住所が遠い場合は保証金をとったりしている。

2. 貸出の制限　貸出し冊数を制限しているのは1軒だけであるが，他の店でも初回だけ制限したり，本の種類によって制限したりしている。期限は大部分が翌日制である。

3. 貸料　だいたい定価の1割程度。延滞の場合は料金の半額程度の追加料金が付く。

4. PR　店の所在も，新本のお知らせもしない店が多い。近所の客を相手にしているからであろう。

5. 立ち読みの処置　14軒は拒否している。口ではっきりことわる，はたきをかける，意を含んだ言い方をするなど。

V　利用状況について

1. 利用者数　1日平均41名で，最高は100名であった。北区の1日の利用者総数は708名となる。これは区立図書館の1日の利用者319名の2倍以上に当たる。

2. 利用者の種類　小・中・高生はほぼ同じで，これに主婦が比敵している。大学生・勤め人・店員などはやや少い。

3. 利用度　1日のうちで来店者の多いピークは午後4～7時である。1月のうちでは，月始め，月末，土曜にある程度集中している。1年のうちでは，7～8月がピークで，12～1～2月がそれに次いでいる。

VI　貸出冊数について

1. 1日平均冊数　平均して1日に74冊で，最高は200冊程度の店もある。北区では1日平均1,172冊の貸本が読まれていることになる。区立図書館の1日平均利用数435冊よりはるかに多い。

2. 貸出の内訳　貸出した本を読み本：マンガ：雑誌に分けて平均すると，22：46：32となり，マンガが最高である。

3. 所有冊数と貸出冊数　この両者の相関係数は$\gamma=+0.813$で，大きい店ほど貸出が多いことを示している。

VII　収入について

1日平均，貸料のみの収入は1,880円で，最高は約5,000

円である。ただしこの数字はあまり信頼できない。

Ⅷ あとがき

この調査に協力をたまわった北区役所及び区立図書館の方々，貸本店の方々，ご教示をいただいた図書館短期大学の諸先生方にお礼を申しあげる。

（付記：この資料は標記のレポートから阪本が要点を抜き書きしたものである。）

SUMMARY

1. The book renting service is as popular today among the general public in Japan as has always been. Soon after the Second World War such shops sprang up all over the country. Those who had joined the National Book-Renting Association amounted to 8,000 and it was said that there were in fact nearly twenty thousand shops in all. In those days, about eighty percent of the customers were primary and secondary school pupils who read mainly comics and magazines.

The boom began to decline after about 1955. The cause might be increasing shortage of time in childhood owing to the ordeal of examination as well as to the diffusion of TV. Now the number of union members is about 2, 500 ; and, including outsiders, it may be about 3, 500. As for customers, the number of adults is increasing.

2. A study was done on some specimen book-renting shops in Tokyo and Kanagawa prefecture. It says that the smallest shop has about 400, and the largest shop about 3, 300 regular customers, of which 44% are over 18 years old. On the average, 60 to 300 copies are circulating a day. Among them, comics are most numerous, which are coming to be read by adults. Those books that serve academic study, technical discipline, or daily domestic use, are not read. The main circulation is books for entertainment.

3. Another study in one ward in Tokyo tells that only 4 shops are specialized, and the other 14 shops serve as new or old book sellers, also selling sweets. These shops are small, and stock 500 to 4, 000 copies on their shelves, half of which are comics. Books are rented out for a day, and the charge is about 10% of the list price. The amount of both users and books rented out in a month is two or three times more than those of the public library in that ward.

年　間　時　潮

国内情報(昭和43年)*

東京学芸大学　北島武彦**

1　月

第9回毎日芸術賞きまる

毎日新聞社主催の毎日芸術賞（昭和42年度）の受賞者が次のとおりきまった。

文学　小説「殉死」（文芸春秋刊）司馬遼太郎

美術　「右郷書作展」（3月　東京三越本店）　手島右郷

舞踊　「春の会」（6月　国立劇場），「秋の会」（10月同）武原はん

音楽　二期会による楽劇「パルジファル」公演（7月東京文化会館）大橋国一，若杉弘を中心とする出演者一同

写真　写真集「ヨーロッパ・静止した時間」（鹿島出版会刊）奈良原一高

「点字毎日」に朝日賞

毎日新聞社点字毎日部は多年にわたり，「点字毎日」などの発行を通じ，盲人福祉に貢献した功績で昭和42年度朝日賞の社会奉仕賞を受賞した。

クローデル賞　村上・山崎両氏に

日仏文化交流につくしたフランスの詩人，劇作家ポール・クローデル（元駐日大使）を記念し，フランス語著作物のすぐれた邦訳に対して贈られる第2回クローデル賞は村上光彦・山崎庸一郎両氏共訳の「ドゴール大戦回顧録　VI」（みすず書房刊）にきまった。

芥川賞・直木賞きまる

第58回芥川・直木賞は22日，次のとおりきまった。

芥川賞　柏原兵三氏「徳山道助の帰郷」（「新潮」7月号）

直木賞　野坂昭如氏「アメリカひじき」（「別冊文芸春秋」101号），「火垂るの墓」（「オール読物」10月号）

三好徹氏「聖少女」（「別冊文芸春秋」101号）

第13回青少年読書感想文全国コンクール入賞者発表

毎日新聞社，全国学校図書館協議会共催の第13回青少年読書感想文全国コンクールは148万4,245編の応募があり，都道府県の各地方審査を通った435編のうち，総理大臣賞その他の受賞者がきまったが，総理大臣賞は次のとおり。

千葉県印旛郡四街道町中央小学校3年　久米元康子

島根県松江市第3中学校3年　長岡貞男

山形県山形市山形北高等学校3年　村山美智子

地方作家の作品を無断引用　五味康祐氏が陳謝

作家五味康祐氏が「小説新潮」昭和31年5月号に発表した「指さしていふ一妻へ」という作品は奈良の郷土史家北村信昭氏の「美佐子抄」から無断借用した部分がみられることがわかり，五味氏は早速謝罪するといっている。

2　月

網野菊氏「一期一会」などに読売文学賞

第19回読売文学賞がこの程次のとおりきまった。

小説　「一期一会」網野菊

戯曲　「五人のモヨノ」飯沢匡

---

*　Domestic information on reading

**　KITAJIMA, Takehiko (Tokyo Gakugei University)

随筆・紀行　正・続「パイプのけむり」団伊玖磨
評論・伝記　「江戸後期の詩人たち」富士川英郎
詩歌・俳句　「青南集」，続「青南集」土屋文明
研究・翻訳　「シェイクスピア全集」福田恒存

河出書房が「夏目漱石賞」設定

河出書房では漱石生誕101年を記念して，夏目漱石賞を設定した。賞金は100万円で個人賞をたてまえとして，前年度単行本として出版された文芸作品（小説だけでなく，詩・評論・戯曲も含む）の中から最優秀作品を選び，授賞する。

「凱旋門」から盗用の形　山崎氏の小説「花宴」資料集めに手違い

作家山崎豊子氏が「婦人公論」に連載中の小説「花宴」の内容に，レマルクの「凱旋門」（山西英一氏訳）の訳文と酷似している部分があることを「花宴」の愛読者大阪府高槻市在住の天野元さん（教員）がみつけた。山崎さんは「創作の過程で秘書が資料集めした時に起った手違いで，悪意はなかったが，結果的に訳文を盗用することになってしまった」と非をみとめた。一方「凱旋門」の訳文について著作権をもっている山西氏は「たしかに訳文からの引用と思えるが，ことを荒立てるつもりはない」と好意的な態度をみせる。しかし「花宴」は昨年12月「婦人公論」の読者賞を受賞し，読者の大きな期待を集めているだけに，“人気作家”の制作モラルについて考えさせられる問題が含まれているようだ。

笑い止らぬ本の月賦販売　月5万セット売る店も

全巻先渡し，千円程度の分割払い――こんなキャッチ・フレーズで自動車，電気製品並みにセールス・マンをくり出し，百科事典，全集を売りまくる“本の月賦販売会社”が大変な勢いで伸びている。3～4年でビルを建てたり，電子計算機を入れたり……といったところもあるほどだ。去年あたりから町の大きな本屋まで月販部を作り出し，いま全国に“本の月賦販売会社”は約100社あるといわれている。その口火をきり，「会社の伸び率はソニー，ホンダにもまけない」と業界のトップの座を占めているのが東京のT月販社だ。いま百科事典3組，文学全集，美術全集，歴史全集など8組，子ども絵本セット15組を月賦販売網にのせ，月間5万セット，10億円を売り上げている。

3　月

星氏の「妄想銀行」推理作家協会賞

第21回日本推理作家協会賞は2日，過去の業績も加味して星新一氏の「妄想銀行」（新潮社刊）にきまった。

芸術選奨受賞者きまる

昨年を通じて文学・評論・映画・演劇などの分野で，新しい境地をひらいたものに贈られる芸術選奨の第18回受賞者が2日，文部省の選考委員会できまった。文部大臣賞は10部門，13人であったが，読書関係では次の各氏である。

故吉野秀雄　晩年10年の歌を収めた歌集「含紅集」は切実に人生の悲しみをついていて，格調が高い。
作家藤枝静男　短編集「空気頭」で志賀直哉的リアリズムの実践から，その脱皮へのコースをたどりつつ，しかも伝統的な私小説の変革をくわだてた。
写真家奈良原一高　写真集「ヨーロッパ・静止した時間」は異なる文明に立向った作者の心を詩的に描きだしたもので，写真の表現に新しい境地を開いた。
仏文学者森有正　随想集「遙かなノートルダム」でフランス生活17年の体験をもとに，日本と外国の文化を中心に，社会・宗教・芸術などの広い分野にわたって，独自な文明批評をこころみた。
美術評論家土方定一　美術評論「ドイツ・ルネッサンスの画家たち」は当時の社会を背景に，代表的な画家たちをとらえた視野の広い研究で，とりわけ実証と理論の結びつきが鋭い。
新人賞＜文学＞　作家加賀乙彦
＜評論その他＞　演劇評論家　河竹登志夫

太田氏に農民文学賞

第11回（昭和42年度）農民文学賞は太田忠久作「おれんの死」（同人雑誌「群盗」別冊中編特集号所載）を受賞作にきめた。

。

新潮社が三賞設定　「日本文学大賞」や「日本芸術大賞」

新潮社は今度あたらしく「日本文学大賞」，「日本芸術大賞」，「新潮新人賞」の３賞を設定することになった。これは同社の前社長故佐藤義夫氏の遺産をもとに作られた財団法人新潮文芸振興会（佐藤亮一理事長）が主催するもの。この３賞発足と同時にいままで同社が設定していた「新潮社文学賞」，「同人雑誌賞」，「小説新潮賞」の３賞は昭和42年度（第14回）をもって廃止される。

山岡氏の「徳川家康」に吉川英治文学賞きまる

第２回吉川英治文学賞と吉川英治賞か７日きまったが，吉川英治文学賞は山岡荘八氏の「徳川家康」（講談社刊）に授賞された。なお吉川英治賞には独力で日本童話会を設立し，童話文学の発展につくした後藤楢根氏ほか４氏が受賞した。

神話ふえ　変る現代史

４月から小学校の教科書が３年ぶりに変る。教育課程の改定よりひと足先に神話が登場したのをはじめ，明治百年ムードにのって，日本海海戦の絵などがとり入れられた。この半面憲法第９条「戦争放棄」の記述がうんとちぢまり，地方自治の特色である「リコール制」の説明も姿を消した。日教組や現場の先生，学者たちは平和教育否定のあらわれと文部省の検定に強く反発しているが，一面では検定と採択の関門をくぐりぬけようと教科書編集者が手心を加えた「自主修正」もかなり多かったといわれる。

女流文学賞に平林たい子氏

第７回女流文学賞は11月，平林たい子氏の「秘密」（「新潮」昨年10月号）は決定した。

学士院賞きまる

昭和43年度（第58回）の恩賜賞と日本学士院賞は12日つぎのとおりきまった。

恩賜賞　「西夏語の研究」京大文学部助教授　西田竜雄

学士院賞「蒐玖波集の研究」広島大文学部教授　金子金治郎

「チトクローム系の研究」大阪大理学部教授　奥貫一男

「地磁気の変化磁場とその微細変動の原因に関する研究」東北大理学部教授　加藤愛雄

「集団遺伝学の理論の研究」国立遺伝学研究所集団遺伝部長　木村資生

「境界層に関する流体力学的研究」東大宇宙航空研究所教授　谷一郎

「無菌動物の研究」名大医学部教授　宮川正澄

二氏に田村俊子賞

第８回田村俊子賞は12日次の２氏に授賞ときまった。

松田解子氏　小説「おりん口伝」（新日本出版社刊）

吉行理恵氏　詩集「夢の中で」（晶文社刊）

「巴里夫人」からの“盗用”でおわびのことば　山崎豊子さんが発表へ

山崎豊子氏が「婦人公論」に連載した小説「花宴」の一部に，芹沢光治郎氏の小説「巴里夫人」から盗用の疑いがあると，去る２日附の「朝日新聞」文化欄で文芸評論家奥野健男氏が指摘したが，11日山崎氏は芹沢氏のほか，日本文芸家協会会長丹羽文雄氏，同理事井上靖氏，円地文子氏等とあい，その結果山崎氏は「日本文芸家協会ニュース」４月号と「婦人公論」におわびのことばを書くことになった。

萩原延寿氏の「馬場辰猪」にきまる　第３回吉野作造賞

第３回吉野作造賞は23日，萩原延寿氏の「馬場辰猪」（中央公論社刊）ときまった。

４　月

こんどは翻訳盗用

新潮社発行の「ジャン・ジュネ全集」第４巻に収録されている水田晴康訳「囚人たち」（戯曲）に対し，東京都新宿区の一羽昌子さんから代理人を通して「自分の翻訳をもとにしたものだ」という抗議があり，水田氏も盗

用をみとめて謝罪した。

小島功氏にきまる　文芸春秋漫画賞

第14回文芸春秋漫画賞は6日，小島功氏の「日本のかあちゃん」(「漫画サンデー」連載)，「7−8＝1」(「漫画読本」3月号）にきまった。

芸術院賞きまる

昭和42年度（第24回）芸術院恩賜賞と同院賞は8日次のとおりきまった。

恩賜賞　藤島亥治郎氏　古寺の再現設計による多年の業績に対し

院賞　第2部（文芸）　作家網野菊氏　作家としての多年の業績に対し　他9氏

迢空賞・蛇笏賞きまる

第2回迢空賞（短歌）は鹿児島寿蔵氏の歌集「故郷の灯に」，同蛇笏賞（俳句）は秋元不死男氏の句集「万座」と加藤楸邨氏の句集「まぼろしの鹿」に授賞と17日きまった。

5　月

親日家文豪モラエスの貴重な初版本を寄贈ポルトガル政府　近代文学館に

明治・大正・昭和と前后33年間にわたって日本に住み，日本文化を海外に紹介したポルトガルの文豪モラエスの初版本原書が，この程ポルトガル政府から日ポ親善のため東京駒場の日本近代文学館に寄贈されることになった。寄贈書の主なものは「極東遊記」(1895年リスボン刊)，「日本通信」第1・2・3巻（1904—07年オポルト刊)，「日本精神」(1926年リスボン刊）など，いずれも本国のポルトガルでも入手困難なもので，モラエス研究の貴重な資料である。近代文学館はこれを機会に国内にあるモラエス関係の資料も集め，“モラエスの棚”を作ることになっている。

6　月

群像新人文学賞　大庭みな子氏に

群像新人文学賞はこのほど大庭みな子氏の「三匹の蟹」(講談社刊）にきまった。

団藤氏らの3作品にエッセイスト・クラブ賞

第16回日本エッセイスト・クラブ賞は17日，団藤重光氏の「刊法紀行」(創文社刊)，泉靖一氏の「フィールド・ノート」(新潮社刊）畑正憲氏の「われら動物みな兄弟」(協同企画出版部刊）に授賞ときまった。

三浦浩樹氏に太宰治賞

第4回太宰治賞（筑摩書房主催）は三浦浩樹氏の「月の道化者」に授賞と桜桃忌の19日発表された。

7　月

貸本マンガは妖怪ブーム

貸本屋のタナに妖怪変化が横行している。「少女スリラーもの」とよばれるマンガ単行本だ。さいきん男の子むけのアクションものなどを抜き，貸本マンガ界の主流にのしあがった。ところがこのマンガの化物，テレビマンガの妖怪とちがって可愛げもユーモラスも皆無。底意地がわるく，なんともうす気味がわるい。低学年では夜中にうなされる子どもまでいる。そして夏休みは貸本がふだんの倍よまれる季節である。

芥川賞丸谷・大庭氏・直木賞該当なし

第59回芥川・直木賞選考委員会は22日，芥川賞は丸谷戈一氏の「年の残り」(「文学界」3月号）と大庭みな子氏の「三匹の蟹」(群像6月号）に授賞と決定，直木賞は該当作なしと発表された。

上毛民俗学会に柳田国男賞

43年度の柳田国男賞は31日，上毛民俗学会（責任者上野勇氏）の「北橘村の民俗」ほか一連の群馬県民俗調査の業績に贈られることにきまった。

8　月

政府の週刊新聞「今週の日本」と命名

政府の施策や法律をもっと積極的に国民にＰＲしようというねらいで新しく刊行される“政府の週刊新聞”の名前がこのほど「今週の日本」ときまり，10月7日付で第1号が発行されることになった。

9　月

実現する初版本複刻全集

今秋から「名著複刻全集・近代文学館」という企画がいよいよ実現されることになった。同全集は明治・大正昭和3代にわたって広く国民に親しまれてきた近代日本の名著あるいは名作を厳選して120編にしぼり，それらをすべて初版本のもとの形のままで近代文学館と図書月販とが協力して複刻するものである。この中にはたとえば福沢諭吉の「世界国盡」（明治2年刊）や仮名垣魯文の「安愚楽鍋」をはじめ堀辰雄の「風立ちぬ」，中原中也の「在りし日の歌」などの文芸作品も含まれている。

谷崎賞該当なし

第4回谷崎潤一郎賞（中央公論社主催）は選考委員会より該当作なしと発表された。

10　月

まどみちお氏に野間児童文芸賞

第6回野間児童文芸賞は2日，次のとおりきまった。

児童文芸賞　「てんぷらぴりぴり」　まどみちお

推奨作品　「車のいろはそらのいろ」　あまんきみこ

「ロザンドの木馬」瀬尾七重

川端康成氏にノーベル賞

「雪国」，「千羽鶴」，「伊豆の踊子」，「古都」などの作家川端康成氏がノーベル文学賞を授賞されることになった。日本人として初めてで，東洋人としては1913年に受賞したタゴール（インド）についで2人目である。

海音寺氏らに菊池寛賞

第16回菊池寛賞は21日，次のとおりきまった。

文学部門　海音寺潮五郎氏（歴史伝記文学作家としての努力と功績）

新聞部門　毎日新聞「教育の森」の村松喬氏を中心とする取材グループ（3か年にわたり，一貫して戦後日本の教育の批判と向上をめざしたシリーズの全巻完結）

読売新聞「昭和史の天皇」（すでに六百数十回に及び的確な調査にもとづいた終戦時の生きた記録を興味深く録述）

演劇・映画部門　渋谷天外氏）新喜劇のリーダーとして，同時にすぐれた作者　館直志氏として長年にわたり大衆に健全な笑いを提供）

その他　布川角左衛門氏（長年にわたり著作権・出版権の擁護に活動，また「日本出版百年史年表」編集委員長として努力）

文化勲章4氏に

今年度の文化勲章は25日，黒川利雄（東北大名誉教授医博），鈴木雅次（日大名誉教授　工博），浜田庄司（陶芸家），堅山南風（日本画家）の4氏に，文化功労者には日本画の小野竹風氏ら7氏が選ばれた。

第22回毎日出版文化賞きまる

第22回毎日出版文化賞は次のとおりきまった。

日本資本主義の思想像　内田義彦　岩波書店

騎馬民族国家　江上波夫　中央公論社

明治維新の分析視点　上山春平　講談社

教育の森（全12巻）村松喬　毎日新聞社

輝ける闇　開高健　新潮社

桂春団治　富士正晴　河出書房新社

戦場の村　本多勝一　朝日新聞社

生命と分子　今堀和友　ダイヤモンド社

紙のフォルム　尾川宏　求竜堂

特別賞　学研新世紀大辞典　新世紀辞典編集部編　学習研究社

11　月

石川近代文学館開く

泉鏡花・徳田秋声・室生犀星など数多い石川県出身作家の著書，遺墨，遺品を一堂に集めた石川近代文学館が3日から一般公開された。金沢市中央公園内に県が450万円かけ，もとの四高図書館の一部を改装したもので，鉄筋コンクリート3階建，1階には展示室，2階閲覧室，3階は会議室，書庫などである。

河上氏の「吉田松陰」に野間文芸賞

第21回野間文芸賞は11日，河上徹太郎氏の「吉田松陰」（昭和41年5月—43年4月「文学界」に連載）に授賞ときまった。

亀井勝一郎賞をつくる

亀井勝一郎氏の三回忌にあたる14日，東京護国寺で“しのぶ会”がひらかれ，席上新人の文芸評論を対象にした「亀井勝一郎賞」の制定が発表された。賞金は10万円。毎年11月14日の命日に発表する。

12 月

マンガ青年のし歩く　花ざかりです同人誌

マンガの同人雑誌がこのところ急にふえた。正確な数字はつかめないが，一応雑誌の形態をととのえているものだけで全国で約300誌，東京だけで50誌をこえるとマンガ雑誌関係者はみている。

出版界に“安保ブーム”

安保関係の本がよく売れている。9年前の60年安保闘争直後に出版された「安保闘争史」が次々と複刊されて好調な売れ行きをみせているほか，新刊の売れ行きもよく，出版界はちょっとした“安保ブーム”である。「日米安保条約の再検討期である70年が近づき，国民の関心が高まっているからではないか」というのが出版界の共通した見方である。

クローデル賞平岡篤頼氏に

第3回クローデル賞（毎日新聞社・日仏会館共催）はこの程平岡頼篤氏訳のクロード・シモン作「フランドルへの道」（白水社刊）にきまった。

（注）本稿をまとめるにあたり，「朝日新聞縮刷版」「毎日新聞縮刷版」各昭和43年1—12月号を使用した。

海　外　情　報*

東京教育大学　高 木 和 子**

第2回国際読書会議

1966年にパリで第一回会議がもたれ，隔年にＩＲＡの主催で催される国際読書会議は8月1日から3日までデンマークのコペンハーゲンで第2回会議が行なわれた。日本からも，日本読書学会の室伏武，倉沢栄吉，滑川道夫の三理事と井上尚美氏が出席された。この会議は，「人間の権利と人間の問題としての読み」という中心テーマで行なわれ，アメリカ，スカンジナビア諸国の会員を中心に，ヨーロッパ，アジアの各国から約1,500名が参加した。会議の内容については，室伏氏から別に報告されているので，ここでは省略する。

第13回ＩＲＡ年次大会

ＩＲＡの第13回年次大会は，4月24日から27日までの4日間，マサチュセッツ州ボストン市で開催された。中心テーマは「学校教育の全教科課程における読みの指導」であった。

大会では，シンポジウム，研究報告，ゼミナール，討論会，博士論文審査，研究授業など多数の催し物があったが，その中心をなす，シンポジウムと研究報告について紹介する。これを見ると，ＩＲＡにおける現在の研究活動の関心事が何かがつかめるであろう。

シンポジウム

シンポジウムは大きく4つの主題のものに分かれ，それぞれがいくつかの副主題をきめて行なうという形式がとられている。

㊀シンポジウム1：研究の開拓と発展

---

* Information abroad on the study of reading

** TAKAGI, Kazuko (Tokyo University of Education)

1） 全体会議

2） 基礎的な研究計画とその応用

・変化の測定のための基礎的研究計画

・地位比較研究のための基礎的研究計画

3） 学習に障害をもつ者への読みの指導に関する研究

・研究の批評と評価

・将来の研究と実践への示唆

4） 言語学と読みの教育

・研究の批評と評価

・将来の研究と実践への示唆

5） 発達的な言語学習におけるレディネスの評価

・研究の批評と評価

・将来の研究と実践への示唆

6） 読みにおける認識過程

・研究の批評と評価

・将来の研究と実践への示唆

7） 学校における研究の遂行

・当面する問題

・実際の問題に側した研究計画

8） 研究報告の作成

○シンポジウムII：知覚と読みの不振

1） 読書困難症（難読症）の解釈

2） 読書困難症の発見

3） 視知覚の役割

4） 読書困難症の取扱いについての研究

5） 知覚の改良

6） 研究の読書困難児

○シンポジウムIII：読みの現場指導

1） 全体会議

2） 読みの現場指導における有望な実践

・小学校の教師

・中学校の教師

・治療指導や矯正指導の教師

・成人教育の教師

○シンポジウムIV：国際的場面における読み

1） 比較読書学

2） 読みにおける主要問題の発見

3） 各国の読みのプログラムの発達

研究報告

研究報告は，24の研究主題ごとに部会がもたれ，その部会の中でさらにＡＢＣの３つのクラスに分かれて発表が行なわれた。ＡＢＣのクラスは，対象の年令別や，副主題別に分けて設けられている。

○研究主題１：読書不振の発見と診断

Ａ）発見の手続き

発表：・読書不振児の発見

・１年生の一時的読書不振児の発見

Ｂ）教室での診断

発表：・診断者としての担任教師

・診断的技術としての個別読みの利用

Ｃ）模範実演授業

○研究主題２：評価

Ａ）診断的技術

発表：・必然的要因の決定

・音読診断対黙読・音読診断

Ｂ）テストの利用

発表：・レディネスの測度としてのＩ．Ｔ．Ｐ．Ａ．

・標準テストの機能的利用

Ｃ）非公式な調査票

発表：・非公式調査票の解釈の規準

・非公式調査票の作成

○研究主題３：優秀児の読み

Ａ）読みを通しての批判的思考力の発達

発表：・読みを通しての批判的思考力の発達

Ｂ）優秀児プロプラム（小学校）

発表：・低学年の優秀児に対する読みのプログラム

・中学年の優秀児に対する読みのプログラム

Ｃ）優秀児プログラム（中学・高校）

○研究主題４：学習に障害をもつ者に対する助力

Ａ）障害児とその教師

発表：・障害児について何を知っているか

・小学校の障害児への読みの指導

B）読みと障害児

発表：・障害児に与える本の選択についての実際的問題

・入門期の読みにおける障害児の言語パターンの発達

C）読みと障害を持つ青年

発表：・障害をもつ中学生への読みの指導における種々のアプローチ

・障害をもつ中学生に与える適切な教材選択

○研究主題5：言語学の役割

A）方言，意味論，文章論

発表：・方言，方言と読みとの関係

・読みにおける文章論と意味論

B）精神言語学言語心理学

発表：・言語と読みの心理学

・我々は読む時に何を見るか？

○研究主題6：模範的プログラムと実践

A）小学校

発表：・非便宜的読みのプログラムの利用

・夏期の読みのプログラム

B）中学・高校

発表：コムプトンのＲＥＡＤプロジェクト

・模範的な読みのプログラムの体系化

C）州単位でのもの

発表：・読みに関する州での研究

○研究主題7：読みの不振児への助力

A）小学校段階

発表：・学業不振児の教師の役割

・読みの不振児に対する個別読書

B）中学校段階

発表：・中学校における読みの治療指導計画

・読みの不振児のための読書センター

C）特別な奉仕活動

発表：・読書診療所

・治療読書センターの発達

○研究主題8：読みの教育改革における州の役割

A）読みの教師と専門職の免許について

発表：・全国の現状の概括

・オハイオ州の場合

・ウイスコンシン州の場合

B）読みのカリキュラム指導の発達

発表：・フロリダ州の場合

・カリフォルニア州の場合

・ニューヨーク州の場合

C）州のプログラムと連邦のプログラム

発表：・連邦主催のプログラムにおける州の役割

・ミラー・アンルー活動の立法化

○研究主題9：カリキュラムの傾向と読みの指導

A）社会科

発表：・社会科におけるカリキュラムの傾向

B）理科

発表：・理科におけるカリキュラムの傾向

C）数学

発表：・数学におけるカリキュラムの傾向

○研究主題10：ERIC／CRIER* と読書関係の情報利用

A）情報の獲得と伝播

発表：・情報獲得のプログラム

：・情報伝播のプログラム

B）情報の組織化と回復

発表：・読みの手段の一般的分類型

・電子計算機による回復

C）ERIC／CRIER の発達

発表：・教材に関する情報

・将来の発展

○研究主題11：読みにおける測定

A）読みのテスト；過去・現在・将来

---

* Educational Resources Information Center/Clearinghouse on Retrieval of Information and Evaluation on Reading の略称

1966年にアメリカ教育省が設立した教育に関する文献情報収集機関 ERIC の中の読みに関する部局が CRIER である。

B）テスト構成

発表：・よりよい標準テストの作成

・テスト技法としてのクローズ法の利用

C）テスト結果の利用

発表：・幼稚園での読みに失敗した者の調書

○研究主題12：学校教育の役割

B）就学前プログラム

発表：・夏期プログラム

・早期刺激法プログラム

C）Head Start Program

発表：・ワコーHead Start Program

・デトロイト Head Start progarm

○研究主題13：語認知の役割

A）語集中法の技術

発表：・音韻的・構造的分析

・文脈上の手がかり

B）手続きと教材

発表：・ラングエジ・ラボラトリーの利用

・教師作成教材

C）評価

発表：・関連教材における語集中技法のテスト

・音韻のテスト

○研究主題14：聞きとりの役割

A）読みと聞きとりとの関係

発表：・聞きとりと読みの相互関係

B）研究授業

C）手続き

発表：・テープ教材の利用

・小学生における聞きとり技能の発達

○研究主題15：読みの個別指導

A）研究法

発表：・研究の基礎

・言語経験と個別読書

B）教材の利用

発表：・貸本とクラス（の機関）誌の利用

・基礎コース教科書の利用

C）指導技術

発表：・指導技術面からみた読みの個別指導

・読みの指導における自動化

○研究主題16：文学の役割

A）文学と読み

発表：・文学を批判的に読む

B）小学校における文学教育

発表：・年少児向きの民話

・興味と鑑賞の発達

C）中学校における文学教育

発表：・読書における興味の発見と測定

・読みの技能を上達させる手段としての文学

○研究主題17：読解と学習技術

A）小学校低学年段階

発表：・読解技能の独立な使用

・創造的読書

B）小学校高学年段階

発表：・新聞を読むことによる読みの技能の形成

・効果的な読解技能の形成

C）中学校段階

発表：・学習における能力の発達

・非言語的記号での理解技能の発達

○研究主題18：読みのプログラムの開始

A）小学校水準

発表：・全カリキュラムの中に読みを強調する――ある実験校のための計画

・小学校低学年に効果的な折衷的読みの指導

B）中学校水準

発表：ピッツバーグの中学校むけ読みのプログラム

・中学校の読みのプログラムにおける，〝する〟と〝しない〟

C）学校の読書診療所

発表：・学校組織としての読書診療所の設置

・公立学校における読書診療所の発達

○研究主題19：批判読みの役割

A）実演授業

B）指導技術

発表：・小学校におけ批判読みの技術

・高校における推論指導の方法

C）方略（ストラテジー）の指導

発表：・読解への鍵

・読解との関連において小学校教師の用いる方略への疑問

○研究主題20：教材の選択と評価

A）選択と教育的原則との問題

発表：・何故に選択し評価するのか

・新しい教材の評価についての数原則

B）心理学的・社会文化的原則

発表：・心理学的な原則

・社会文化的な原則

C）言語学的原則と教材の選択

発表：・言語学的原則

・一年生に使わせる言語学的教材の選択

○研究主題21：読みの教師への準備段階

A）大学卒業以前

発表：・指導法コースに対する総合的なティームティーチング

・読みの指導法コースの補足としての教師補助経験

B）大学院

発表：・大学院の課程における読書診療所の役割

・連邦奨学金と研究所課程の効果

C）現　場

発表：・公立学校の読みのプログラム改善に対する大学の責任

・現場への指導

○研究主題22：ESEA*と読みの指導の改善

A）全国の実態の概観

発表：・タイトルⅠの利用状況

B）模範的プログラム――タイトルⅠ

C）模範的プログラム――タイトルⅢ

発表：・学業不振児センターでの利用

○研究主題23：読みの指導に対する諸感覚からの接近

A）神経学的接近

発表：・ペンシルバニア大学の読書困難症情報センター

・重症読書不振児の測定と評価

B）感覚運動的要因

発表：・読書行動に関連した視覚的問題

・読みにおける感覚運動的問題

C）読みと盲人

発表：・盲人に対する非形式的な読みの調査票

・読書と盲人

○研究主題24：読みのプログラムにおける図書館の役割

A）良い図書館の基準

発表：・小学校の学校図書館に対する評価基準

・中学校の学校図書館に対する評価基準

B）図書館員と学校教育計画

発表：・図書館員と読みの指導計画

C）児童文学の強調

発表：・児童文学におけるユーモア

・作者の日――児童文学に対する新しい考え

以上が大要である。今年の大会の持徴としては，中心テーマにもあるように理論的なものよりも実践面に重きが置かれ，理論を実際の現場でいかに消化し役立てたらよいかという問題に積極的に取組んでいることである。

なお，例年のように，大会前の行事として読みの将来問題に関する会議と教師のための研修会が開催された。

読みの将来問題会議は今年で第11回目をむかえ，中心テーマは「成人の読み書き指導における方略の指導」であった。会議は，ニュヨーク市立大学のマンガノ教授の司会の下に6人の専門家によって，成人の読み書き能力指導についての研究法や実践についての報告と討論が行なわれた。

---

* Elementary and Secondary Education Act の略称ジョンソン大統領の教育政策の一環として全国的に実施された教育のプログラムの総称。

読みの教師のための研修会

アメリカでは，ＩＲＡの大会前研修会のほかに，ＮＤＥＡ（National Defence Education Act）の主催で全国各地で開催されるもの，各地大学で独自に行なわれているもの，及びＩＲＡ地方支部主催のものなど多くの研修会が催されている。ここでは，規模の大きいＩＲＡとＮＤＥＡ主催のもの，および伝統を誇る各大学主催の研修会について簡単に紹介する。

Ⅰ　ＩＲＡ大会前研修会

4月23，24日，次の4主題ごとの研修会がもたれた。

1　読みの教員養成についての問題

話題1）新任教師の読みについての問題

2）最初の読みの指導法コースの課題

3）養成コースの指導法の専門化

4）養成コースの学生を子供に接しさせる

5）養成コースの指導法の成績の評価

2　批判的な読みと聞きとり

話題1）批判読みの研究と発展

2）批判聞きの研究と発展

3）批判的解釈技能の指導のための訓練

4）研究と実践への応用

3　言語心理学と読みの教育

話題1）理論的見地

2）研究の応用

3）読みの指導

4　読みに重点を置いた全カリキュラムの編成――小学校の場合

話題1）読みの過程の要因とその全カリキュラムの中での応用

2）基礎的指導の充実と全カリキュラムの中での巾広い読み

5　読みに重点を置いた全カリキュラムの編成――中学校の場合

6　読みの指導における二人の専門家の平行指導

話題1）プログラム化した家庭教師の報告

2）オークランド市プロジェクトの報告

3）幼稚園児の読みの準備期間の家庭教師として5・6年生を用いるプロジェクトの報告

4）教育における専門家併用の法律的側面

5）教育における専門家併用の専門職的側面

Ⅱ　ＮＤＥＡ主催研修会

ＮＤＥＡの研修会は，聴講者の水準を次の3種に分類し，各々のレベルに従った研修を行なう。

（1）読みに関して修士程度の専門的研究しをた者

（2）読みの基礎コースの上にさらにいくつかのコースを習得した者

（3）読みに関して1つのコースしか習得していない者，何も習得していない者

研修は，教師，監督者，管理者としての能力を向上させるための一般研修と，児童文学，教科における読み，読めない子の指導といった主題ごとの研修とに分けられ，学年水準別に企画されている。期間は2週間から6週間で，各州1～2ヵ所の会場で行なわれた。

Ⅲ　大学主催の研修会

大学主催の研修会は，テンプル大学が毎年1月に行なうのを例外として，大低は夏期休暇中に開催されている。多くの場合，専門家の講演を中心とした指導と討論の場となっている。以下，開催期間と主題を紹介する。

テンプル大学（第25回年次研究会）1月22日～26日　主題　読みの困難の症状：教室と診療所

シラキュー大学（第10回研究会）7月17日～21日　主題　読み書き能力：全ての年令層についての基礎的な読みの技能

マーケッティ大学（夏期研修会）6月19日～7月8日　主題　読書と子供の世界観

南メソディスト大学（第7回研究大会）6月10日～7月28日　主題　読みの教育と実践

ミズリー大学　7月10日～12日　主題　読みの教室指導での重要点

ジャージー市州立大学（第7回年次大会）7月8日～19日　主題　読みにおける現実の問題

言語によるコミュニケーションに関する会議

2月11日から13日まで，ルイジアナ州ニューオルリーンズで言語によるコミュニケーションに関する会議が，「読みの過程」というテーマで開かれた。この会議は，連邦政府の機関である児童の健康と人間発達についての研究所（National Institute of Child Health and Human Development）の主催で，健康とか健康に関連した人間の問題をとりあげて，1963年から毎年開催されている。今までにとりあげられた問題には，人口問題，生物学と幼児死亡率，成長と発達，成人の発達と寿命，精神薄弱などがある。

「読みの過程」に関する会議はコーネル大学のレヴィン教授と，ギブソン教授の司会のもとに26人の専門家が次のような主題のもとに意見をたたかわせた。

第1部

・筆記体系の特質

　スペルと発音との対応

　研究を要する領域

・視知覚と読み

第2部

・文法構造が読みに及ぼす影響

・書かれた情報の受容プロセス

・読みに関するモデル

第3部

・会話と読みとの関連

　会話と読みの理解に関するモデル

・刺激としての多様性

第4部

・感覚上の欠陥

・読みの障害

会　　報

常任理事会（4月14日）

1　国立国会図書館の児童図書公開の件

　このことについて公開閲覧を希望する会から，運動の見通しが多少好転してきたこと，図書整理の予算が僅かだが取れたことの報告があった。運動資金1口を追加寄付した。

2　機関誌の件

　「読書科学」の原稿が集まらないので遅刊状態から回復できないことが報告された。

3　44年度総会・大会の件

　8月10日・11日，東京・市ケ谷の私学会館を会場として，別掲のような企画で開催することに決定した。

4　「現代読書心理学」の編集の件

　大学紛争の余波で原稿が集まらないが，遅延を取り戻すために，編集を阪本・岡田・室伏の3氏に一任した。

公開研究会（5月24日）

　倉沢栄吉氏「アメリカにおけるReadingの指導法の展開について」

公開研究会（4月26日）

　阪本敬彦氏「読書問題児の分析」

常任理事会（9月2日）

1　第3回世界会議の件

　1970年8月シドニー（オーストラリア）で開かれる予定の第3回世界読書会議に代表者を送るようＩＲＡから要請してきたので，出席の希望者を募ることにした。

2　本年度大会の件　　既報のように実施を決めた。

研究談話会（6月2日）

　ルイジアナ州ニューオルリンズのロヨラ大学教授（教育学）J. B. Tremonti 博士から米国の読書教育の動向を聞いた。

人 事 異 動

尾原淳夫氏（理事）4月1日付で大阪市立第2工業高等学校長に。大阪市教育委員会在任中は学校図書館担当の指導主事として活躍されました。今後のご雄飛を祈るとともに本会へのご支援を期待いたします。

飛田文雄氏（会員）東京女子体育大学講師に。

岡田温氏（理事）図書館短期大学長から，東洋大学社会学部教授に。図書館学講座を担当されることになった。

桑原善作氏（理事）昭44年度末をもって退会されることになった。任期中のご協力に感謝申しあげる。

河北憲夫氏（会員）出版科学研究所長に昇進された。

雑　報

. The Journal of Reading Behavior 創刊

National Reading Conference から上記の季刊学術誌が創刊された。読書及び言語行動の原著論文，理論的立場の討議，読書教育の教育学的研究の批判，関連領域の解説などが掲載される。編集は Georgia 大学の L.E. Hafner と，Florida 大学の G.D. Spache。誌代年額6ドル，申込みは Journal of Reading Behavior, College of Education, University of Georgia, Athens, Georgia 30601, U.S.A.

日本出版学会設立

3月14日上記の学会が発足した。目的は，出版およびそれに関連する事項の調査・研究を促進し，研究者相互の協力と連絡をはかり，あわせて，内外の学術団体・研究機関と協力し，出版文化の向上に資すること。事業として研究会，講演会，展示会の開催，出版に関する文献の収集・整理，機関誌・会報等の刊行，出版に関する教育の向上のための事業などがあげられている。連絡所は[redacted]。

読書科学　第12巻　総目次

原著

大神貞男　非行原因論と読書療法の治療理論（1）　No. 45—P. 28

大阪・子ども読書研究グループ　科学読み物の現状と指導上の問題点　45—1

阪本一郎　『冒険ダン吉』の作品分析　43—18

阪本一郎・今井路子・篠原寛子　幼児のお話の能力の発達　43—36

阪本一郎・藤井真澄・堤淑子・荒井佳子　絵本と子ども　44—23

阪本一郎　児童漫画『長靴の三銃士』　44—36

阪本一郎・石井昌子・倉谷道子　物語の理解における子どもの態度の診断の試み　45—17

佐藤泰正　盲児の点字触読に関する発達的研究（3）　43—25

滑川道夫　桃太郎像の変容（3）　43—7

滑川道夫　桃太郎像の変容（4）　44—1

久本智子・芳賀純　児童文学における童話の原話と再話の児童による鑑賞態度の比較研究　44—15

飛田文雄　小泉信三の読書論について（1）　44—1

飛田文雄　小泉信三の読書論について（2）　45—30

飛田文雄　亀井勝一郎の読書論について　45—10

実践記録

加賀美秋子　読書人格をめざす読書指導の一事例　43—42

武野昌文　集団読書指導のあゆみ　45—35

中島章一読書興味指導と学校図書館PR活動との関連　45—41

資料

朝日新聞社　ホワイトカラーと読書　43—45

小売全連　全国小売書店・実態調査報告書　43—47

国会図書館　日本の出版統計　43—48

出版科学研究所　こどもと読書　43—46

室伏武　第2回世界読書学会議の報告　45—49

書評

平岡敏夫『速解現代国語』　44—43

浜中重信『小学生の読書指導』　44—43

日本読書学会入会案内

Ⅰ　日本読書学会会則

第1章　名称と事務所

第1条　本会は日本読書学会と称する。

第2条　本会の事務所は当分の間日本女子大学児童学研究室内に置く。

第2章　目的と事業

第3条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第4条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2. 会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3. 会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4. 読書及びその指導に関する内外諸文献の調査並びにその紹介。
5. 内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6. 会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7. 会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第3章　組織と運営

第5条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第6条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第7条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1. 理　事　　若干名
2. 監　事　　2名

第8条　理事及び監事は総会において正会員が互選する

第9条　理事は本会の事業執行の責任を負う。

理事によって理事会を構成する。

第10条　理事の互選により理事長を置く。

理事長は会長として本会を代表する。

第11条　理事の互選によって理事長の外に常任理事若干名を置く。

理事長及び常任理事によって常任理事会を構成する常任理事会は理事長の委託をうけ本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は本会の会計を監査する。

第13条　理事及び監事の任期は2年とする。但し重任を妨げない。

第14条　役員はすべて無給とする。

第15条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第4章　会　　計

第16条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第17条　会費は当分の間年額1,000円とし毎年3月末までに次年度の会費を納入すべきものとする，

第18条　本会の会計年度は毎年4月1日より始まり翌年3月31日で終る。

決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第5章　雑　　則

第19条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

Ⅱ　日本読書学会入会手続

1. 会員は研究大会に参加・発表し，機関誌「読書科学」に論文を掲載することができます。
2. 会員には機関誌「読書科学」が無料配布されます。
3. 入会希望者は，年度会費1,000円を添えて学会本部宛お申しこみ下さい。
4. 氏名には必ずふりがなをつけ，所属を明記して下さい。
5. 読書科学バックナンバー購入希望の方は誌代を添えてお申しこみ下さい。（送料学会負担）
6. 御送金は振替東京3213番　日本読書学会を御利用下さい。
7. 学会本部所在地　　東京都文京区目白台 2-8-1　日本女子大学家政学部阪本研究室内

Vol. 12, No. 4. June, 1969

昭和四十四年六月二十日発行（年四回発行）

THE SCIENCE OF READING

Edited by The Japanese Society for the Science of Reading
President : SAKAMOTO, Ichiro
c/o Department of Child Study, Japan Women's University, Japan.

CONTENTS

Feature Articles : The scope of reading, 1968

Preface ····· *SAKAMOTO, I.* ····· 1

Studies on reading,

educational, (Ⅰ) reading ····· *OKADA, A.* ····· 5

educational, (Ⅱ) reading guidance ····· *MASUDA, S.* ····· 9

psychological ····· *SATO, Y.* ····· 16

Scope of publishing world ····· *KAWAKITA, N.* ····· 22

The rental bookstores and their users ····· *KAGIYAMA, M.* ····· 27

A report on rental bookstores ····· *SHIMIZU, H. et al.* ····· 31

Information on reading,

domestic ····· *KITAJIMA, T.* ····· 34

abroad ····· *TAKAGI, K.* ····· 35

Official Notes ····· 45

第12巻　第4号
＜通巻　第46号＞

昭和44年6月20日　発行

会員頒布（会員外頒価　300円）

東京都文京区目白台2—8—1
日本女子大学家政学部阪本研究室内
振替東京3213番

編集・発行者　日本読書学会
代表　阪本一郎

発行所　日本読書学会

印刷・第一印刷株式会社